

連赤総括論争 2

プロレタリア單一党——プロレタリア武闘共闘へ！

新清算主義批判

目 次

ニセの赤旗を掲げて赤旗を裏切る、新清算主義
||投降主義の脱走・裏切り分子を掃滅せよ！

転向・腐敗と堕落・敗北主義・日和見主義・解
党主義の自己暴露としての、高原の清算主義者
宣言の本質を暴く。

清算主義の残りかすを同盟内から一掃しよう！

H J 戦争に敵対する上原の清算主義に革命的鉄
槌を下せ！『不死鳥作戦（よど号ハイジャック
戦争公判中間総括と報告）』批判

ニセの赤旗を掲げて赤旗を裏切る、
新清算主義||投降主義の脱走裏切り分子を掃滅せよ!

今年の四月、「共産同赤軍派マルクス・レーニン主義派（準）」と称する、自分の正体をひた隠しにした——だが頭隠して尻隠さずで、そのみえすいた意図だけは露骨にむき出しへいた——グループから、「連赤総括の眞の獲得に向けて」なるパンフが発行され、コソコソと配布された。我々は、その主張が余りに愚劣なため、又、その主張が既に批判され、論破され尽した清算主義の古くさいむし返しにすぎないため、あえてかゝりあることもないものと考え、相手にせずそのままにしておいた。

しかしその後、一方ではこのグループと高原君が手を結び、反帝反社帝やプロレタリア革命路線を声高に叫びつゝ、清算主義の毒草をまきちらし、それでもって組織活動を開始し始め、他方では同じ悪質な清算主義である仏派が、毛沢東思想評価や反帝反社帝という根本問題など不問にして、精算主義、日和見主義の一点で一致することからわたりに船と手を結び、連合してプロ革派攻撃の反プロ革野合戦線——又しても野合

だ!!——の策謀を張りめぐらし始めるという事態が生み出された。又この動きを先頭に、これまで鳴りをひそめていた清算主義、日和見主義が、その各々の貧弱な思想と勢力を慰め合いつゝ、夢よもう一度と、反プロ革を旗印に種々の離合集散と野合戦線を再開している。

一撃打ち破られた清算主義・日和見主義は、わがプロ革派の闘いの前進に恐怖し、死に瀕して、再び装いを変え、アレコレのグループに分立しつゝ、わがプロ革派に一斉にかみつき始めた。このことはわがプロ革派の正しさと前進の証左である。しかし我々はこのことに満足していいかないと。放置しておけばそれはやはり、息を吹き返して、一つの潮流となり、今日の革命戦線を攪乱し、むしばみ、影響を持ち、それだけプロレタリア單一党建設とプロレタリア革命の事業を遅らせるからである。だから打ち破るだけでは足りない。更に追撃して徹底的に掃滅しなければならない。そのためには一度の戦闘だけではなく、くり返し闘わねばならない。打ち破られた清算主義・日和見主義の装いを変えた新たなのがきと策謀の本質を暴露し、批判し、闘争し、徹底的に掃滅せよ!! そうして批判の武器を磨き上げ、武器の批判に転化せよ!! 今はその最も必要な、かつ有効な時であろう。

清算主義・投降主義の最悪の見本＝「共産同M」派（準） パンフ批判

一、坊主主義と投機的サークルの典型

最近（本年四月）「共産同赤軍派マルクス・レーニン主義派（準）」と称する正体不明のグループから、「連赤総括の眞の獲得に向けて」なるパンフが発行され、コソコソと配布されている。

我々がこのグループを「正体不明のグループ」というのは、その清算主義としての本質や実体が不明だからではない。（注）「正体不明」というのは、このグループが同盟再建の闘いとして、自分達がどのように闘つてきたのか、何とどう闘い、どう闘いを通じて、どのような發展・分化・転化をもつて、このグループを結成するに至ったのかを何ら総括し、明らかにすることなく、まさに突如として天上から降つて湧いたかのように自己の立場を規定づけているからである。三年有余の分派闘争に自分達は関係がなかつたかのような無責任さをさらけ出し、人の眼を欺こうとしているのである。こゝにこそこの連中の自由主義的組織觀、組織に対する徹底した日和見主義的態度が暴露されているのだ。

（注）実際にはこのグループは、わがプロ革派に紛れ込んでいた一部の腐敗した野心家、小ブル日和見主義投機分子であり、この連中はわがプロ革派が結成後、思想・政治路線上、組織上の純化と結束・中央集権化をかち取り、貫いて、プロレタリア單一党建設に大きく前進しようとした刹那に、プロ革派を根底からくつがえし、解体せんとする陰謀と画策を開始しそれが打ち砕かれるや、連赤「新党」問題とその総括、プロレタリア革命主義を、又半年間のプロ革派の闘いを全面清算し、自己のさもしのサークル根性とサークル的「縄張り」と野心を温存・延命せんとして脱走した裏切り脱走分子である。（尙彼らには、過去何度か、重大な局面や戦闘時での脱走というくり返された習性がある）昨日までは清算主義粉砕を叫んできた人々が、今日は全面清算を主張している。昨日までは同志一向全面支持・論叢全面支持・プロ革派の路線万才を声高く叫んできた人々が、今日は突如とし、何の総括もなく、又党内論争一つ組織することもできずに飛び出して、「一向の連赤総括糾弾、三・三・一集会糾弾、プロ革派の路線は経済主義とテロリズムの折衷だ」とわめきて、わがプロ革派に砲火を浴びせていく。これ程の無責任・無節操な変節ぶりこそ、この連中の投機主義と脱走分子としての本質を余すところなく示している。この連中の清算主義と路線輕視の日和見主義的浮動・動搖と、サークル根性やサロン的なサークルを温存し、防衛せんとするさもしの根性を「非合法党」

や「革命家の軍事組織」の大言壯語の空文句で飾り、隠蔽せんとする志向は、又しても陰謀、策謀による正体不明のサロングのサークル（「M-L派」）へと「結実」した。

「今日では教条主義である人々程日和見主義であり、一方では経済主義・大衆運動主義・合法主義の方向に大きく方向転換し、他方では口先だけの空文句をはいてサロン化し、自分は闘わないで、テロリズムや戦闘団主義に、これに拝跪するかたちで寄生するようになつてゐる。」（機関紙5号）そして今日の教条主義とは全て、他ならぬ「左」右の清算主義である。この「M-L派」なるものも、まさにその清算主義によつて自己の日和見主義を正当化し、維持防衛し、その経済主義・サークル主義を、他方では口先だけの空文句をはいてサロン化し、自分は闘わないで、テロリズムや戦闘団主義に、これに拝跪するたをちで寄生することによつて陰蔽し、温存しようとしているのである。

この連中は、経済主義と口先だけの空文句によるテロリズムへの寄生を特質とする自己のサロン的サークルを温存し、延命させ、それを基盤とする連合主義・野合主義の二回大会一同盟再建路線のために、まずは同志一向頭に抱き、それが自からの身を危うくするやいとも簡単に放り出し、今度は高原君と手を結んだ。これがこのグループの正体である。

実際、このバンフの冒頭「(1)はじめに」の「連赤総括論争

を軸とした同盟再建活動」の総括は、全く没主張的で、客観的事物の特殊な本質を把握する、具体的真理についての弁証法的唯物論の原理を否定するものである。

観念論と形而上学の手口

清算主義者の常套手段

この「連赤総括論争を軸とする同盟再建活動」の総括は、観念論と形而上学の見本である。それは第一に、認識の源泉及び真理の基準としての実践を否定してゐること、第二に、「一が分かれて二になる」「対立物の闘争と統一」の弁証法を否定していること、第三に、事物の自己運動・発展の源泉・推進力・源動力を「対立物の闘争」に求めるのではなく、それをこの事物の外部に、純粹主觀・純粹意志に求める觀念論の形而上学である。その現実の意義・帰結は、常に実践を捨象し、「書物から書物へ、概念から概念へ」のり移る書斎主義であり、具体的・現実的問題や対立物の闘争から免れた抽象的「高み」に自己をおく日和見主義である。それはある時には調停主義へ、或る時には自己絶対化となり、一方での絶対的主觀・永遠不変の、絶対的真理なるものへの願望と、他方でのサークル的・サロン的評論活動への、のり移りのたえまない動搖である。（彼らには、認識が一つの過程であり、

主義的な評論であり、このグループはこの三年間、自からは何事もしないで、天上から「連赤総括論争を軸とする同盟再建活動」を見降してきただのよう評論している。そして「正に結果から本質に接近できなかつた我々の未熟性が、同盟と多くの友人達に混乱を持ち込んだことを卒直に自己批判したい。」と、何やら得体のしれない「自己批判」なるものをおこなつてゐる。一体、自分達が「連赤総括論争を軸とする同盟再建活動」をどのようにおし進めってきたのか、分派闘争をどのように進めてきたのか、それはどのような発展、分化・転化をとげてきたのか、或いはどのような積極的前進や誤りをもつてきたのか、その誤りの根拠・誤りを生み出した情勢とそれをただし、克服止揚する觀点と方法等々を明らかにしていくことなしに、「自己批判」なるものがどのようない意義を持ちえようか。「自己批判」という体のいゝ言葉を百万辺並べたても、それはまやかしの坊主主義でしかないのだ。（この連中は何よりもまず、今まで党内闘争、分派闘争を一度も積極的におし進めず、サロン的サークルとその繩張りの維持温存に努め、もっぱら陰謀と策謀をくり返してきたこと、及びプロ革派を脱走したことを自己批判すべきであろう。）

それにこの「結果から本質に接近しえなかつた」云々という考え方とは、連赤問題が、まずあらかじめ存在していただけでなく、連赤問題の相対性と絶対性の関係がわからぬ。又真理の具体性がわからぬ。）

又彼らは同じところで、今や「路線問題の根本的解決の端緒にたどりついた」と述べてゐる。このことによつて、彼らは、これまでの「連赤問題総括を軸とする同盟再建活動」は路線問題と全く無関係であり、路線上の総括・路線論争など全く関係なかつたと考えて來たことを自からバクロしてゐる。

彼らは具体的な、或いは個別的なものを離れて、その外に、それとは全く別個に普遍的なものが抽象的にあると考えてゐるのである。このようにして、彼らは△路線▽を、具体的なもの、個別的なものは全く別個に、その外にある何か抽象的な絶対物といふように死んだドグマや純粹主觀・純粹意志や概念にしてしまつてゐる。「個別的なものは普遍的なものへ通じる連鎖のうち以外には存在しない。普遍的なものは個別的なものゝうちだけ、個別的なものを通じてだけ存在する。汎ゆる個別的なものは（なんらかの仕方で）普遍的なものである。汎ゆる普遍的なものは個別的なもの（の一部或いは一側面或いは本質）である。汎ゆる普遍的なものは全ての個別的な事物をたゞ近似的に包括するだけである。汎ゆる個別的なものは、完全には普遍的なものゝうちにはいらない、等等……。」（レーニン、弁証法の問題について）である。

このことを否定する觀念論によつて、彼らは又結局のところ、

これまで路線問題を捨象してきたからダメだったと自己批判ならざる自己批判をしているのである。（とすれば彼らは今まで、全くもってプラグマチズムであり、追随主義であり、概念から概念へ、書物から書物へのり移り、たゞたゞ自己のサークルの温存延命と連合的・野合的同盟再建のためにやつてきたということなのか？そのために脱走したのだ！）

又、この同じ部分で、「この局面では、連赤総括論争は、「武装闘争」を堅持するのか、清算するのかが主要側面であり、連赤－「新党」の党的立脚点・総路線を、思想問題を軸に、総括をおし進めようとした部分は中間派に止まり、総括論争の主要軸としては登場していかなかった。「武装闘争」の堅持を教条的に主張した小ブルジョア急進民主主義のテロリズムは、この局面に於る「積極面」にもかゝわらず……。この過程で、一向議長の個人作業として出発した「プロ革派」は、相互の誤りを克服する△止揚派▽として、総括論争の主軸として成長してきた。」と客観主義的に評論することによって事実をも歪曲してくる。だが実際は「この反動的風潮の中で、我々赤軍派のプロレタリア革命派は孤立させられ、政治的に抹殺される危機に永続的にさらされたが、武闘堅持と赤軍派の実践と理論の防衛という点で、革左と断呼たる一線を引きつつ、他方で連赤問題の本質が、小ブルジョア革命主義への止揚の挫折、反動化にある抱え、連赤問題発生後の、小ブルジョア革命主義の残存とその教条化に対し、これと

従来して闘争し、これを止揚せんとしたのであつた。そしてこの闘争を通じて、他面でこの寄生物たる清算主義を一掃する党内一党派闘争の路線をいたのであり、この「左」右の清算主義（教条主義）の一個二重の闘いの中心基軸に思想問題と毛沢東思想の評価と、反スターロッキズムと毛沢東教条と毛沢東思想の評価と、反スターロッキズムと毛沢東教条の同時相互止揚をおき、この解決の要に……の獲得をする。）（その当時それが多数を占めたか、少数を占めたかは、「連赤問題総括を軸とする同盟再建活動」にとつては副次的問題なのだ。客観主義的評論家は、△主要軸▽△主要側面▽とくうことを、数の多少や声の大小で把えていたのだ。（尚、こゝで、当初は「小ブルジョア急進主義のテロリズムが積極面であった」と無責任な総括をしていることは、自分達も当初は小ブル急進主義のテロリズムの道を進むべきだつたといふことなのか？一体それをどこで変えたのか？）そして右翼清算主義と形だけ「左」の革左や反スターロッキズムとの三面党内一党派闘争によつて発展させ、かつ国際的・国内的進攻気運の拡大と結びついて、自からを主軸へと高め上げてきたのである。

「我々は自からが招いた結果を『プロ革派』を踏み台にしつゝその党的責任をマルクス・レーニン主義に立脚したプロレタリア革命路線の獲得と、その実践の中から明らかにしていったのである。」

に立脚したプロレタリア革命戦争路線を確立できず、情勢の急速な煮つまりと、大衆の自然発生性に押跪し、テロリズムへと純化していったのであり、赤軍派一連赤の主要側面は、非マルクス主義の小ブル急進主義のテロリズムであった。「それ故、非マルクス主義のテロリズムを主要側面とする旧來の同盟路線」「……思想闘争は、銃の物神化の中で、増え非マルクス主義のテロリズムへと純化し、「肅清」を結果にしていったのである。」

要するに、この主張は、ブンド及び赤軍派は戦術主義＝自然発生性への押跪の歴史であり、赤軍派の歴史は、小ブル急進主義のテロリズムを純化していく過程であり、一連の武装闘争・銃撃戦もこの小ブル急進主義のテロリズムの現われであり、肅清はその必然的到達点であつた。だからそれを全面清算し、ML主義の政治－軍事－組織路線を獲得しなければならないといふことである。

これは又何と「命題前提主義」の最悪の典型であろう。

「非マルクス主義の小ブル急進主義のテロリズム」なる本質

がまず普遍的に存在し、この本質の疎外化＝現実化の過程として一連の行動があり、それを自己回復することを通じてこの本質は純化し、発展し、完成していくといふ客観的観念論。実践の発展を、対立物の闘争と統一として、具体的・歴史的に、諸条件の総体との連関において、発展（運動）において分析し、総括していくのではなく、純粹主觀、純粹意志を実

新しい装いをこらした、使い古された清算主義の「必然的到達点」論

このパンフの立場はつまるところ次の見解に集約されている。「我々は、このヘブンド主義▽△赤軍主義▽、すなわち戦術主義＝自然発生性への押跪に我々の誤りの根源が存在していると考える。この戦術主義の純化、極限化の敗北が連赤－「新党」の敗北だったのである」。とりわけ「六・一七闘争の勝利的展開の中で、我々はその戦術の純化し、ML主義

践の根源として把える観念論、恣意主義。彼らにとつて革命

闘争の実践とは、超歴史的な、絶対的な、純粹意志たる路線の自己展開過程であり、この路線が一つ一つの行動を通じて自己を現実化していく。実践はこの純粹意志たる「路線」の体現物としてのみ意義があり、従つて又、一度定められた路線は永遠に発展もせず、完全な勝利を約束するか、完全な破壊に行き着くかだけである。だから「我々の路線の破綻が、連赤一「新党」を通して体現された」という転倒した考え方が引き出されるのだ。(彼らの手法によれば、赤軍派の闘争史には、どんな矛盾も、どんな対立物の闘争もなかつたかのように、「小ブル急進主義のテロリズム」の魔法の杖によって全て消し去られるのだ。)

こういう観念論の形而上学はこの数年間、清算主義によつて使い古されてきた論法であり、日和見主義の手口である。このように日和見主義によつて同盟の全面清算と解体を策しながら、よくも、「△止揚派▽→「プロ革派」の総括視点の意義は、(a)ブルジョア反革命に屈することなく、又気分的に反抗することなく同盟の抹殺・解体策動から党を防衛し、(b)同盟再建の積極的ヘゲモニーとして自己を確立しようとしたこと」などとぬけぬけとと言えたものだ。こういう言辞は、この連中の反革命的日和見主義を隠蔽するイチヂクの葉にすぎない。又この連中が「正体不明」で、自己の立場を天方に、何か絶対的普遍の発見へ求めざるをえないのもこゝに根拠を

の潮流の闘争とは無関係な、現象的な殺された者の立場・犠牲者の立場・遺族の立場であり、更に檢事の立場に密通し、それに自身の過去の脱走、逃亡、裏切りを重ね合わせ、そうすることによって「十二名」を辱しめていく。この連中は肅清を、「小ブル急進主義のテロリストがそれを強制しようと感じて十二名を殺害した」と把え、同盟赤軍派の歴史を、小ブル急進主義のテロリストが制覇し、支配し、純化していく過程と把え自己の脱走の延命をかけてそれを打倒せよと叫んでいる。これはまさにブルジョアキンペーンへの完全な屈服と追従であろう。だから今では、ブルジョア公判庭でも、同盟赤軍派の全闘争を、「小ブル急進主義のテロリストが市民に迷惑をかけた行為」と自己批判している。(よど号H. J. 上原発言をみよ!)これは全くもつて転向であり、宮本一派が「ストライキ万能論者が国民に迷惑をかける」といふのと、うり一つなのだ。具体的眞理を否定するこの連中は、もはや階級間の区別、革命と反革命の区別さえ明らかにできず、ブルジョアジーに屈服していくのである。「△止揚派を踏み台にして宮本一派の陣営へ」が、この連中の進路である。「「ブンド主義・赤軍主義を清算」じで、日共宮本一派へがえり、「その中で『党内闘争』を開始するところから始めたまわ！」そういう修正主義・日和見主義の混沌たる沼地こそ君達にふさわしい。しかし、そういう沼地へ我々をも引きずり込もうどう君達の「闘争」に対しても、我々は断固として闘い、

もつてゐるのだ。

この連中が「対立物の闘争と統一」を否定し、自己を天上の高みにおいて客觀主義的に評論し、「小ブル急進主義のテロリズム」なる純粹意志の運動とその破綻として総括した、彼らの側での根拠がないわけではない。それは他ならぬこの連中が、六九年秋に同盟赤軍派を脱走し、裏切り、にもかゝわらずその後、同盟赤軍派の周囲に寄生し、一度たりとも党的責任を負うことなく利用してきただけであること、こういふ自身の腐敗を、同盟赤軍派の全歴史を「小ブル急進主義のテロリズム」とその破綻として全面清算し、解体することによって正当化し、温存し、延命させたいという、たゞそのことである。

実際、この連中がわめきてゝいる「ブンド・赤軍派の歴史は戦術主義・自然発生性への摔倒の歴史」「赤軍派の本質は小ブル急進主義のテロリズムで、肅清はその必然的到達点としての破綻」なるものは、日共宮本一派、革マルが、ブルジョア反革命と唱和してわめきてたものと基本的に同一である。革命闘争・革命隊列からの逃亡分子であり、革命闘争・革命隊列の前進のために責任をもつて闘うことなく、調子の良い時はその周囲に寄生して利用し、困難な時にはそれを攻撃している連中が、日共宮本一派・革マルの陣営に移ることは全くもつて必然的である。この連中の「十二名の立場」は、階級間の相互関係や新党結成をめぐる二つの路線、二つ

鉄槌を下すだろう。

二)のパンフの総括は徹底した日和見主義であり経済主義とテロリズムの折衷であり、敗北主義である。

彼女が、わが△止揚派の連赤問題総括に対する「批判」として具体的に述べてゐるところは唯立つである。少々長くなつて引用すると、「△プロ革派」総括の核心は④反ダントロシキヤヌと毛教条主義の同時相互止揚が国際・国内階級闘争の到達地平から要求され、赤軍派と革命左派はそれに挑戦したこと。⑤そのことは、両派の合同、「新党」建設として、又新たな階級闘争の質、「銃によるゼンタツ必戦」の路線を要求した。⑥その党的質の転換に向けて、連赤と「新党」は△小ブル革命主義▽を徹底化・止揚し△ブルタリア革命主義▽へ飛躍すべく思想上作風問題を組織したが、指導部が反動化し敗北した。の三点である。我々が問題にしなければならないのは、②の目的のために④を媒介にして、⑥の手段がどちらだととある。「△プロ革派」の総括は、⑥の内的総括を不間に伏すことだが、「新党」指導部の反動化されなければ、連赤と「新党」の路線は正しかつたといふことに結論づけてゐる。「△プロ革派」は△小ブル急進主義のテロリズムをたる連赤と「新党」の路線を根本的に切離す、不間に伏じ

と。

この批判に対応する彼らの総括は、要約すれば、「①は單なる歴史的客観的要因、客観的情勢の問題であり、②の内的総括、③の内因たる連赤ー「新党」の路線ー政治・軍事路線、組織路線の総括が必要であり」「路線的核心としての「統によるセンメツ戦」ー戦術→「軍の党化」「人の要素」ー組織路線が、戦術主義・自然発生性への拝跪の徹底化たる非マルクス主義の小ブル急進主義のテロリズム」のどうしようもないものであり、「この路線の下での観念的な思想闘争・思想純化が「共産主義化」であり、その必然的帰結が肅清であった」というものである。

この連中は、自分の観念論的形而上学の甲羅に似せてしかわがプロ革派の連赤問題総括を理解しえず、従つて重要な点は何一つ理解せず、歪め、勝手に「プロ革派の総括」なるものを作つ造して、批判ならざる批判・中傷・誹謗を加えていく。そして他方で、肅清の現象をたゞそれだけ取り出して、結果解釈的にヒカラビた論理のツジツマをあわせ、マヤカシの図式をデッヂ上げている。ところがこのマヤカシの図式には、赤軍派の闘いの一切を清算し、七一年秋に直面した革命戦争派の根本的課題と新党志向を全面清算する、客観主義・観念論・どす黒い日和見主義の全てが含まれてゐるのだ。

（「テロリズム貫徹のために批判者を暴力的に抹殺した」という一本の黒い糸は、その集約として、この連中を日共官本

この連中は「銃によるセンメツ戦」の方針はそれ自身小ブル急進主義のテロリズムとアブリオリに断定することによって、自己の日和見主義の軍事思想を暴露している。だが毛沢東やグエンザップを引き合いで出までもなく、革命戦争の基本法則は敵戦闘力の殲滅とプロレタリアート人民の側に力を貯え、育成し、主導権を、政権をかちとること、又革命権力を強化発展させることである。従つて戦争の基本形態は白兵戦であり、接近戦であり、殲滅戦によって勝敗の決着がつくのであり、だからこそそれは、戦場における革命的人民の革命的攻撃精神・精力を根本的基礎とするのである。実際、七一年における偉大な輝ける戦闘として銘記される六・一七戦闘と、戦闘自衛民兵の戦闘とも言うべき九・一六東峰戦闘は、いずれも徹底的な革命的攻撃精神と精力を発揮した殲滅戦ではなかつたか。この連中は遊撃戦を何か白兵戦・殲滅戦以外のものでなければならぬと主張して、破壊攪乱戦を絶対化し、自己の日和見主義ーそれは必らず流賊主義の浮浪人的軍事やアリバイ的・自己満足的火遊びへ転落するであろうーを暴露している。それはつまるところ、敵に勝利すること、プロ独を樹立することを否定する敗北主義であり、更に三十年代以降のスターリン式軍事路線や、六十年代前半期の、殲滅戦を否定し消極防禦と技術優位を主張した羅瑞卿とも同じなのだ。

我々の総括について、少し長くなるが重要な意義をもつものだ。

一派・革マルに結びつける系である。）我々はこの反革命的日和見主義の正体をあばき出さねばならない。

彼らの、①ー目的、②ー媒介、③ー手段というようなバラバラに切り離して機械的に結びつけるような総括を我々がしているのかどうか？「銃によるセンメツ戦」の戦術は、それ自身小ブル急進主義のテロリズムなのか？それは最初から必然化するどうしようもないものだったのか？更に反スターロッキズムと毛数条主義の同時相互止揚、それへの挑戦は、単なる歴史的客観的要因・客観的情勢の問題にすぎなかつたのか？国際ー国内階級闘争の到達地平と連赤問題は全く無関係なものであったのか？我々はこれらについて、既に、具体的実践を正面にすえて、具体的かつ全面的に、根本的包括的に、対立物の矛盾・闘争・発展において、くり返し総括している。とくにプロ革派結成政治・組織報告、シリーズ共産同蜂起派（さらぎ）批判②（紙三・四合併号）の第二章・四章同③（紙五号）第一章・二章で詳しく述べてある。だからこゝでは、この連中の反革命的日和見主義を暴くことにしておこう。

a、党建設・共産主義的政治・プロレタリア革命戦争を否定する、小ブル日和見主義ー流賊主義のテロリズムと七一年秋の清算

のであるので引用しておこう。「①十二ー一八闘争から二一・一七銃奪取闘争、そして連続M闘争から六・一七機動隊殲滅戦として着手され、展開された革命戦争は、六・一七殲滅戦によつて、さらには九・一六三里塚殲滅戦や連続爆弾闘争等によつてブルジョア国家権力との階級攻防を内乱状態に深化させ、総力戦体制へと突入していく。」「②すなわち、それまでの正規的武装闘争を支えていた小ブル学生層の自然発生的な急進運動の解体として示される六・一七闘争後の階級諸情況は、プロレタリア的武装蜂起を組織する蜂起の機関＝ソヴィエト＝根拠地の建設、及び社会主義的革命勢力＝革命主体の思想的・政治的・理論的・組織的武装なしには正規的革命戦争＝殲滅戦・白兵戦の一歩の前進もありえないことも示した。こうしてプロレタリア独裁運動として統括される根拠地＝闘争機関建設の問題の解決、革命主体の依拠すべき階級・階層の組織化、革命勢力の思想的統一と組織的團結、階級形成＝党建設が、正規的革命戦争の遂行のための実践的課題として革命派につきつけられることになつたのである」

（③ところが七一年秋期は、革命的プロレタリアートの前進による秋期闘争・沖縄闘争の持続的昂揚の中で、正規的革命戦争＝殲滅戦とブルジョア国家権力の集中的弾圧との勝敗を組織しきれないが故に殲滅戦を貫徹しきれない状況におかれていた。そのため革命的武装諸組織は正規的革命戦争へと

前進しきれず、根拠地のない無後方の状態でも可能な、かつ革命主体の思想性・政治性・組織性を根底的に問いかれない側面をもつた爆弾闘争へと革命性・攻撃性を疎外させ、従つて連続爆弾闘争を殲滅戦・白兵戦へと結合しきれず自然発生性を生み出してしまったことになったのである。だから六・一七闘争後、敵の確実な殲滅の遂行に限界ある爆弾闘争を止揚するため、殲滅戦、とりわけ銃を軸とした殲滅戦を提起し、ブルジョア国家権力の弾圧を粉碎する正規の革命戦争の遂行を重視したことは全く正しいことであった。」「④それでは銃による殲滅戦の提起が爆弾闘争の連続化の中でその止揚として正しかったにもかかわらず、唯銃唯軍主義の極左路線に転化し挫折したのはどうしてであろうか？言いかえれば銃による殲滅戦の致命的限界がどこにあったのであろうか？それは、小ブル急進運動に立脚した正規的攻撃という六九年前峰から、プロ独運動に立脚した正規的革命戦争へと路線的根本的転換をかちとれず、プロ独運動を発見しきれないまま小ブル急進運動からの召還を固定化し、従つて「不利な条件での決戦をさけ、不利な条件を有利な条件に転化させ、有利な条件での決戦を行なう」。つまりプロ独運動の昂揚・衰退に前衛の進攻、防衛を合致させる事、防衛は退却と反攻の準備から成り立つ積極的防衛でなければならず、反攻の準備はプロ独運動の昂揚を創出する組織戦である事、等々の戦術原則を確立しきれず、組織戦の挫折や山岳路線の限界を銃による殲

とう真理、従つて共産主義的政治を前衛主体と革命勢力の問題として問い合わせることになつたのだ。すなわち革命主体の思想的政治的組織的再武装・再統合——思想—政治路線、プロ独の秩序・作風・規律・組織性、党形成＝階級形成の一元的観点、依拠階級とプロ独運動組織化の組織戦・根拠地建設、党建設－党の軍事としての、政治と軍事の統一、そして革命的武装諸組織の戦略的総路線への統合等々を真剣に問うことになつたのだ。又この正しい解決こそが、「銃による殲滅戦」を正しい道に沿つて貫徹し抜く基礎たりえたのだ。当時の指導部の問題は、これらを解決できないまゝ、それ自身を「銃による殲滅戦」で突破せんとして、「銃による殲滅戦」を絶対化し、唯銃・唯軍主義へと転化させていたことにあるのだ。（だから又、連合赤軍の結成も、党建設を基軸にして推進しきれず、不斷に戦闘団主義的結合に流れる弱点を内包していた。）

だから、「銃による殲滅戦」の挫折は逆に、先に指摘した課題の解決を要求し、新党志向を一層広汎な、緊切なものとしてみなぎらせた。事実、新党志向はそのような全課題をしてみなぎらせて、（尙、我々の総括が△新党志向△と具体的「新党」を区別しているのに対し、この連中は△新党志向△については全くふれず、完全に抹殺し、清算し、眼をふさいでいる。そこに又脱走逃亡分子としての本性がある）そしてこの新党志向の中で、極左路線や組織戦の無方針に対する

滅戦でもつて突破せんとしたところにある。そのため両派指導部は、客観的諸情況やプロ人民を無視した前衛のみによる主観主義的な突撃を、「銃による攻勢的・組織的・計画的殲滅戦とか、銃を軸とした目的意識的建軍へ」とか称して絶対化する唯銃唯軍主義の極左路線におらへつたのである。」
すなわち、一方では、革命戦争派の前進・進出による秋期闘争・沖縄闘争の持続的昂揚の中で、正規的革命戦争＝殲滅戦とブルジョア国家権力の集中的弾圧との勝敗の決定が、一つの節として要求され、他方では、前衛の正規的武装闘争が依拠していく小ブル急進運動が解体・衰退し、革命的武装諸組織の分散化・流賊化が生み出された。この矛盾を止揚するものとして、連続爆弾闘争が解体・衰退し、革命的武装諸組織へ飛躍の環Vとして「銃による殲滅戦」を提起することによって、それまでは曖昧に混然一体となつていた、「どの階級の、どの階級に対する武装であり、戦争なのか」「武闘・武器・軍隊を、プロレタリア階級の党が握り、統率し、指揮するのか」という問題が、根本的に問われ、真に真剣な、焦眉の不可避の問題となつたのだ。言いかえれば、それまでの「政治を戦争として貫徹する」「政治的勝利を軍事的勝利として戦取る」「政治闘争を武装闘争へ発展転化させる」等々によって革命主体と革命闘争の前進をきり開いてきた実践が、あらためて「戦争は別の手段をもつてする政治の継続である」

する造反を生み出し、国際—国内階級闘争の新たな発展段階において、思想—政治路線問題の解決とそれを基礎とする団結のための、反スターロッキズムと毛教条主義の同時相互止揚、「銃による殲滅戦」をプロ独運動の組織化—根拠地建設と結びついた、プロレタリア階級独裁樹立の計画的・正規的戦闘として遂行するための、権力問題・戦略問題・政策問題の正しい解決、又プロレタリア革命戦争を遂行する党的組織的団結・組織陣型のための、プロ独の作風・規律・組織性・秩序の確立等をめぐって、党内—党派闘争、綱領論争、整風運動をよび起したのである。

この連中の総括方法に則して言えば、当初bが実践的要求・方針・「飛躍の環」として、赤軍派と革左（神）の合流の主要側面であつたが、その追求の中で、aは単なる歴史的客観的要因ではなく、主体的な緊要の、党建設の根本問題＝思想—政治路線問題へと転化し、cも決して單なる手段ではなく、革命主体の思想的政治的組織的再武装・依拠階級と根拠地問題等、綱領—戦略—組織路線の問題へと転化し、その意味でa・cが主要側面となり、その正しい解決こそがbを正しく道に沿つて実現していくことを可能ならじめる基礎として、緊切の要求・課題となつたのだ。すなわちbを通じて、思想—政治—組織—依拠階級、軍事—陣型等の総路線が問題となつたのだ。この連中の総括こそ、bを現実の革命闘争の実践の発展から切り離し、a・c等の総体の連関と切り離して抽

象化・絶対化し a・c 等とは無関係に、別個に、独立して、軍事路線、組織路線の問題があると考えているのであり、これこそテロリズムの典型なのだ。この連中は△路線▽を、形態や力学の問題、組織形態や交戦形態や力学關係の見通しの問題として考え、連赤問題総括を戦闘形態と組織形態の問題に一面化・絶対化し、何か全てを解決する絶対的に正しい形態——まさに純粹意志の表現形態として——を路線と考えているのだ。この連中のこの見地こそ、軍事を（共産主義）政治と切り離し、党建設やプロレタリア階級とは別のところに、独立的に、超階級的に考え、力学主義・形態主義・技術主義の、流賊的戦闘団主義のテロリズムなのである。この連中のこの総括の結論は、不可避的に、「銃による殲滅戦」ではなく、爆破闘争をやつていればよかつた、そういう発展段階であった、という日和見主義の陳腐な結論に行き着かざるをえない。まさに「正体見たり枯尾花」である。

b、思想問題を修養と中庸の道にかえ、大衆蔑視—奴隸思想の天才論と經濟主義を吹聴する、「人の要素」「共産主義化」の全面否定——「一が分かれて二になる弁証法」の否定と「肅清」の具体的本質・核心の隠蔽と居直り

だから又、この連中は思想問題を実践と切り離し、非実践的な、抽象的な題目もしくは修養の問題にしてしまい、徹底的解決を求めるのでなく程々にせよ、思想闘争に余りこだわるなど、中庸の道を説いている。この連中はこゝでも個別問題、この連中のいう路線問題等では常に思想問題、思想闘争を排除し、形態主義・技術主義や、日和見主義的な調停主義のお題目としての党風・作風・規律一般の観念的作成等、種々の小ブルジョアイデオロギーを持ち込んでくるのだ。（黒木問題への態度、女性問題への態度、非合法党建設問題への態度、中央機関問題への態度、建軍問題への態度、等々をみよ！全てそうである。）

この連中が a・c の課題を決して実践的な問題としてではなく、お題目の程度にしか理解していないこと、a・c を路線問題と全く別個の問題として考えていること、このことこそ問題なのだ。実際この連中は、「人の要素」を組織路線の問題と把えていた。だが「人の要素」とは、プロレタリア革命における上部構造の革命の土台に対する能動的作用のことであり、思想—政治路線の問題である。この連中は、価値・剩余価値・資本・資本の蓄積を、人と人の関係・生産關係・階級關係として把えることができず、上部構造の革命、思想—政治路線、路線闘争の重大性を把えることができない。プロレタリア階級の思想—政治—組織性一力が上位にたち、支配的となり、その支配を全領域に貢献、闘争を通じて發展すること、このための意識的闘争を把えることができない。だからこの連中は、「共産主義化」が当初、根拠地問題——綱領・戦略・権力問題と作風—規律問題の解決と、それによる同盟赤軍派と革左（神）の対立の止揚のために提起された

的なものと普遍的なものについての観念論をさらけ出し、二元論、いや多元論に陥っている。この連中にとつて思想問題は、政治—軍事路線、戦術、組織路線等の全く外に、別個にあるものであり、思想問題は非実践的な問題、その他の問題は思想問題とは無関係という二元論を主張している。（さもありなん！この連中にとつて思想問題は階級性—科学性的問題ではなく、純粹意志、純粹主觀の問題であり、それは個人の情念の問題に帰着させられるをえないのだから。これは全くもって天才論や野心や投機主義的『無政府主義的組織觀の根拠である。だから又「お互いこう」という中庸の道の「思想問題の総括は正しいが、政治—軍事路線の総括を拒否し、急進民主主義のテロリズムを延命させている」だつて？つきまわさないでおこう」という中庸の道が説教されるのだ。）

「思想問題の総括は正しいが、政治—軍事路線の総括を拒否し、急進民主主義のテロリズムを延命させている」だつて？この珍奇な見解こそ、思想問題を非実践的な、二元的な修養の問題と考え、余りつづ込まないでおこうといふ中庸の道の見本ではないのか？思想問題は、党建設・政治—軍事路線・組織路線・戦術問題等の全てにおいて、その一般的基礎としてはあるのではないか？汎ゆる面でマルクス主義を貫くべきではないのか？我々はどのような問題においても思想—政治第一を貫くのであり、思想—政治路線から軍事路線・組織路線を導くのである。

この連中こそ、思想問題を非実践的、書齋主義的に、知識・お題目・修養の問題にしてしまい、他方では具体的・実践的

こと。それは小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への飛躍、反スタトロッキズムと毛教条主義の同時相互止揚による、プロレタリア革命戦争を真に指導しうるプロレタリア前衛党建設の環として、綱領—戦略—権力問題、作風、規律問題を正しく理論的・科学的に解決していくための、革命主体の共産主義的な立場・觀点・方法の確立、マルクス主義の「生きた魂」の獲得の問題をはらんでいたことをみようしない。そしてこの「共産主義化」が、指導部派の、反動的な山岳路線に立脚した根拠地問題、及び作風—規律問題の解決の志向の論理化・自己権力のブルジョア独裁運動に他ならぬい山岳社会革命主義を反映した思想路線、すなわちブルジョアイデオロギーの本質的基礎としてあるファッショ的な孔孟の道—日本の儒教思想等の非マルクス主義の觀念論を、思想問題、思想闘争に代行させて社帝化する道と、十二名のプロ独運動の追求—都市への移行の要求—プロ人民との結合の追求の中で共産主義化の問題に直面し、指導部派の反動的な超精神主義の観念論的共産主義化に反対して唯物論的共産主義化を暴力的に強制していくことを把えようとしている。だから十二名の立場を継承し、その「敗北」を止揚すべく、小ブル革命主義の反動化、社帝化、そのイデオロギー的基礎を、弁証法的唯物論・史的唯物論・資本主義批判・科学的共産主

義を闇に取つて紛糾し、山岳路線の誤りを克服したプロ独立運動を明確にし、革命の性格、権力規定と過渡期を含めた階級・階層政策、プロレタリア革命戦争の軍事路線、プロレタリア的作風規律、階級形成・党建設等を正しく解決していくねばならないこと、この核心に資本主義批判があることを把えることができない。というよりこれらを隠蔽し、清算してしまつてゐるのだ。だから「肅清」の具体的本質・核心・思想問題を核心とする路線闘争の反動的疎外形態たること、この闘争の性格が何一つ明らかにされないのである。すなわち、こゝでも又逃亡してしまつてゐるのだ。その逃亡の合理化として「思想問題では総括にならない」とか、修養と中庸の道を主張してゐるのである。

こういう連中だからこそ、プロレタリア大衆の中では、思想一政治路線や党組織建設、この下へ結合させ、統合していくなど全く思いもよらず、とにかく「いろいろな側面と形態で組織すればよい」と、技術主義・経済主義を主張し、プロレタリア階級はマルクス主義をわがものとしたり、党建設に結集・結合したり、プロ独立・社会主義革命の闘いに前進成長していくことはありえない、又する必要がないと傲慢にも考え、経済主義に満足せよとのたまうのである。そして、他方で、「革命を決意したインテリゲンチャの純粹意志」でもつてつくり出され、プロレタリア階級が先駆的に絶対的に従うて、経済主義に満足せよとのたまうのである。(何という天才論軍事組織への願望を開陳してみせるのだ。(何という天才論

いたし、卒直に言つて、撤退を開始してからは、毎日毎日精神的に解放され、やつと本当の闘いが始まつたと思ったのである。あの共産主義化の日々にくらべて」というところにこそ、この銃撃戦が沖縄人の革命的決起との結合を志向し、「肅清」の自己批判の一歩を実践的に印し、敵階級・敵権力との戦闘のうちに革命的再起を開始しようとした革命性が明らかとなつてゐるのだ。実際、「肅清」後、「新党」指導部がまだ逃亡・解体だけしか残さなかつたとしたら、それこそ日本革命運動は更に深い打撃をこうむつていてあらう。ところがこの連中は、惨めに降伏しかしてなかつたとしたら、それこそ「新党」指導部には転向、投降の道しか残されず、許されなくして何であらう!まさにここにこそ、数々の裏切りと脱走の過去を持ち、今やその集大成としての裏切りと脱走の跳躍を行なつたこの連中の、反革命的本質、反革命的信条的一切が凝縮されてゐるのである。この連中には、浅間山荘銃撃戦が、山谷、釜をはじめとする全国の下層のプロレタリア——圧迫され、ふみにじられ、搾取され、はずかしめられ、殺され続けてきた、だが又あくことなく陰然公然の階級的反抗の力を強め、この「常に終りのない恐怖であつたし、今もそうである資本主義社会」(レーニン)を革命する道を摸索し始め

—英雄史観であることだ!まさに絶対君主だ。)おやおや?これではまさに「肅清」をもたらした指導部派の小ブル革命主義の反動化、社帝化とうり一つではないか?林彪主義の悪しき典型ではないか?残念なことに、否!幸いなことに、この連中は自分の信念を断固として実行に移すことのできぬい、小心翼々たるマニーロフ気質の持ち主だつたことであり、コソコソと姑息な反プロ革攪乱策動で自分の心情を慰めるこしかできないといふことである。

c、転向・投降のすすめ——銃撃戦の全面否定——

このパンフは、総括の結語として、投降の進めに導いていく。すなわち、浅間山荘銃撃戦は、小ブル急進主義のテロリズムの最も典型化された凝縮であり、どんな革命性ももたない、「肅清」と同じ地平の反動的なものであつたと。この連中にとつては、銃戦は継承されるべき何のものも持たない、単なる反面教師にすぎない、やるべきでない戦闘だったのである。この連中は「連赤被告」に、淀号H・Jの上原に習つて、「小ブル急進主義のテロリストが市民に迷惑を強制した闘い」として自己批判し、清算するよう進めているのである。坂東同志が述べている「我々は既に四・二八沖縄戦争、五・一五沖縄「返還」デーを契機として、東京と、沖縄・熊本を中心として、ゲリラ戦を開始せんとしていたから、何んとか、妙義山越えを成功させようと思つていた。が、自衛隊や政治警察と遭遇した時は、いつでも銃撃戦をやるつもりで

た下層のプロレタリア——に、どれ程の光明をなげかけ、ゆり動かし、支持と共にをかちえたかなど思いもよらない。むしろこの連中はそういうことに憎しみをさえ抱いてゐるのだ。

「共産同赤軍派M・L派(準)」を僭称する革命の仮面を被つた反革命サーカスを掃滅せよ!

転向・腐敗と墮落・敗北主義・日和見主義・解党主義の自己暴露としての、高原の清算主義者宣言の本質を暴く。

転向・腐敗と墮落・敗北主義・日和見主義・解党主義の自己暴露としての、高原の清算主義者宣言の本質を暴く。

高原が、パンフレット「破産した赤軍主義・ブンド主義を清算し、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得しよう」を出して、同盟から除名された、脱落・脱走分子と共に、寄生し、一芝居打とうと画策している。

この行動は、高原が、これまで、のるだけでも、少しは保持していた、十二名の立場にたち、この遺志を引き継ぎ、連赤問題に対峙し、ブンドと赤軍派を止揚してゆく志向を完全に、投げ捨て、プロレタリア党を闇にとる苦闘に耐えきれず、自らの敗北主義・日和見主義を純化し、腐敗と墮落・転向の心象を公然と表明したものに他ならない。

同盟プロ革派の、党建設と革命闘争の破竹の前進に遭遇して、最終的に、プロ革派に結集するのか、これに敵対して転向するのかが問われ、後者の道を選び、脱落分子共と徒党を組んだことを意味する。彼らはこれまで、何度も攬乱と遊泳を繰り返し、徒党を組むことに奔走していくわけだが、残念ながら、誰にも相手にされなかつた。そして、最後に、プロ革派の脱落分子、プロ革の排泄物、汚物共を見つけ出し、こ

問われ、普段に、その危機を赤軍派等によつて、救済され、その都度、その破産がおしかくされてきてから久しいことをおさえておくべきだ。とりわけ、この男が接見禁止中に転向し、清算主義に成り下り、蜂起主義の旗を振り、連合ブンドとの野合を画策していたこと、このことを塩見同志等に批判され、今度は自己保身の為、一転して、超主観的党=軍の、機械的直線前進の小ブル革命戦争に乗り移り、連赤問題の張本人になつたこと、それ故に連赤問題露呈の中で最大のショックを受け、自らの乗り移りの図式に自信を失い、転向していくことを留意しておくべきです。今一つは、プロ革派の周辺にあって、プロ革派に同伴して、プロ革派もこの革命的改造を志向し、原則的な公然たる批判を自制してゐたこと――この男の、攬乱・遊泳策動は十分察知してゐたが、その影響はどうに足らないものであったが故に――それ故に、その正体がプロ革派をツイタテにする形で隠蔽されていたことです。そして、それから三年後、自らの転向=清算主義を隠さねばならぬ諸条件が殆ど失われてゆく中で、今回のパンフレットの発刊の挙にでてきたわけだ。この過程で我々が特に留意しておかなければならぬのは、遠山同志を始めとする十二名の立場にたち、その遺志を継承してゆくことを、連赤問題の立場)にすらし、すりかえつゝ、実質的には、十二名の立場にたつ志向を放棄してしまつたことだ。上原の如き、「山

れに飛びついていったわけだ。

高原が清算主義=敗北主義、日和見主義、腐敗と墮落、転向、解党主義のもとに旗を掲げたことは、何ら驚くにあたらない。彼は既に、連赤問題露呈でもつて最終的に、自らのブルジョア思想では革命運動の中にもぐり込むことは出来ないことを知つてゐたが故に――ブント・赤軍派を清算し、転向の準備を開始してゐたこと、同志・読者諸君は、あの七二年の初春、高原が、『赤軍派をやめる』とか、『中核にゆく』とか、『赤軍左にゆく』とか、騒ぎまわつていたこと、同志=階級の論理にたつてではなく、家族=遺族の論理に立脚し、『赤軍派は補償せよ』とか検事と共通の報服の論理を振りまわして、いたことを思い出することで、このことを十分了解してくれるものと思う。ただ、当時の政治的諸関係では十二名を見捨て、清算主義に加担したりするには、余りにも、破廉恥で糾弾されるのを配慮し、更に高原自身、自らの少ブル革命主義の論理を、清算する論理を提出するだけの能力をもち得てなかつたこと、等からして、清算主義=敗北主義は、隠蔽されただけなのです。

もつとも、このように云えば、何か連赤問題発生以前は、尼ゆくのは、ミスミス死にてゆくようなものだつた」と旧清算主義と同じような主張をする徒輩と手を組み、否それにとどまらず、旧清算主義の大久保一松平一派とすら結託してゆこうとしている点でもこのことは明瞭なわけだ。

高原は、例によつて例の如く、自己の思想的総括、ブルジョア的認識路線の主体的総括なき、脱走がミエミエの、ヘドの出るような責任転嫁の安易極まる自己批判の芝居をおこなし、この立場と結びつけつつ、ブンド=赤軍派=プロ革派を攻撃し、脱走を正当化する、幾つかの、資本主義批判や過渡期世界論の分野、或いは党建設と陣型論の分野での、ペテンの諸觀點を吹聴してまわつてゐる。

そして、この立場、觀点に従つて、内外の反プロ革の清算主義分子共に騒動を起こさせ、この中で、自己の脱走にハクをつけようとしているわけだ。

思想的にはスターリン哲学、政治的には毛沢東教条主義を通したスターリン主義への乗り移り、党建設と陣型論には、「鐵砲が党を指導する」、軍事の自然発生性に拝跪した、党=軍の「軍事組織の党」の少ブル組織論への固執、テロリズムとレーニン主義の折衷、「何をなすべきか」のテロリズムと招換主義による改ざん、總じて、社会主義革命戦争とその党建設からの逃亡を特質にしてゐる。又運動論上ではテロリズムと経済主義が折衷され、教条主義と清算主義が折衷さ

されているが、正に折衷故にも、理論そのものを信じていて、が故に、理論を実践に移す気概など問題外で、実践的には軍事と政治闘争からの招換主義・サークル主義を最大の特質としている。又折衷主義故に、赤報やマル青同や旧清算主義への身売りや野合志向がうずまいていること。

この新清算主義はただただ、プロ革派の革命的フレッシャーから彼等の腐敗を自己防衛する為の、かつての臨総にももとるプロ革脱落の反プロ革徒党連合であり、一臨総には、その内部にはまだ、プロ革名主義を志向する部分が含まれていたが、この部分は、獲得されたプロ革から脱落した分子でなりたっている点で、馬糞の堆積場に過ぎない。それ故、綱領的立場など、なにもなく、結集など出来る筈がなく、結束しても、またパンクする連中に過ぎない。今一つの特質はプロ革派の路線上の圧倒的正しさを知つていて、プロ革を真似るが、日和見主義故その思想・政治上の核心を理解し切れていない点でエセプロ革派であることです。保釈を目前にして、出獄して、保釈の少ブル的生活を満喫したく、プロ革の発生に耐えきれず、組織規律を破り、脱走→除名された、『転向文学者』島木健作に醉心し、保釈されたら、故郷に帰つて、果樹園を経営する、ことを夢見て、又敵前逃亡した最右翼分子上原、典型的な少ブル自由主義の組織、無政府主義、実存主義者、二面主義、女性差別者黒木、論叢をかづぎまわり、プロ革派結成に粉々込み、いざその論叢の実践が要求される立場や観点の根元にある、この男の認識路線の反動性、ブルジョア性をえぐり出し、この破廉恥極まる論理の鍊金術、清算と乗り移りの無節操性を支える思想を引きづり出すこと、何故ならば、この男のように、自己のブルジョア思想をおいかくして、思想と、その政治的主張の論理、図式とを機械的に分離させ、適当に使い分け振舞える処世術をこころえた連中には、つまり最近流行の「建前と本音の使い分け」の才能一単に、『建前』としての政治的論理を粉碎するだけでは不十分である。何故ならば、この破廉恥漢は、自己的思想的総括が問われている限り、平氣で、恥知らずに「自己批判」をやり、又新たに図式をつくりあげ、未熟な活動家をダメシ、政治的延命をはかるからだ。従つて、この男にとって、政治的図式や論理は、己れの個人利害を満足させる為の方便にしかすぎず、その根底には、およそマルクス主義のブルジョア思想とは無縁なブルジョア個人主義思想——それは、左翼的にはスターリン主義の正当化となつて現れる——がトクロをまいていることを、根底的に明らかにして、この男の清算と乗り移りの無節操性による政治的延命のパターンそのものを打碎いてゆく必要があるからです。

や否や無能を暴露し、無節操にも一転して、報復主義に乗り移つた。政治的機械屋、万年日和見主義の篠原、いわば、プロ革派の影にかくれ、その動搖、分散、腐敗を隠蔽していったが、プロ革がボリシエウキ的党活動を力強く推進するのに恐れをなし、「今度は、期制どころではすまなくなる」（上原）と考えた。正真正銘の中間主義者共が寄りそつたからといつて何が出来ようか！

高原は、勿論、これ等の連中に思想的、政治的権威を保持しているわけではなく、いわば反プロ革の論理鍊金の助つ人には過ぎず、この連中にビ態を呈し、そのことによつて自らを寄生させ、細々と余名を保つていてるに過ぎない。

以上からして、我々は、高原の脱走、転向、敗北主義・腐敗、墮落を次の如き順序で、暴露し、徹底して批判するのだ。第一は、高原の、自己批判という手口をもつた清算主義の立場、観点を検討し、その全体像を浮かびあがらせ、これを検討、批判し、この男の脱走、転向、敗北主義、日和見主義、腐敗、墮落の正体を暴き、我々の新清算主義への基本的態度を明らかにするのだ。第二は、新清算主義の武器として使われている、この男の、資本主義批判、過渡期世界論の党建設と陣型の分野に於ける論点を検討し、この男の思想的破産、敗北主義、日和見主義、腐敗、墮落を暴き抜く。第三は、このような新清算主義の立場や観点の批判にとどまらず、この

第二章 転向、日和見主義、敗北主義、解党主義、腐敗、墮落の清算主義の諸論点を批判す。

清算主義の階級的本質は、ブルジョアジーの陣営への転向、反マルクス主義、右翼日和見主義、敗北主義、解党主義にあり、プロレタリア共産主義運動と、プロレタリア党を建設してゆく闘いに耐えきれず、脱落したにも拘らず、連赤敗北を理由にして、自己の脱走を正当化しようとすることがある。間違つても、『革命的清算主義』なんてタワケタ言葉はあり得ず、清算主義が、革命的、プロレタリア的、マルクス主義的であるようなんてことはないのだ。大体、今まで清算主義の旗を掲げてなかつた部分が——少くとも公然とは——何故突拍子に、季節はずれに、急に清算主義宣言を開始し始めたのか、を考えれば、この連中が、プロ革の革命的前進をして、最後的に革命か、脱走かを問われ、旧清算派の歩んだ同じ道を、二番せんじ的に歩み始めた、ということは一目瞭然です。以下清算主義の階級的本質を説明してゆくことにする。

第一節 十二名を始めとするプロ革派が存在し、現に力強く前進している以上、ブンド、赤軍派の清算は反党的、反動的対応であり、タワ言だ。連赤問題が発生したからといって、

それを内部に入つて分析すれば、赤軍派—連赤—「新党」の間には、殺された十二名のプロレタリア革命派を始め、獄中外に多くのプロ革派の前生は生み落されていたこと、或いは、十二名の遺志を受けつぎ、連赤『肅清』の小ブル革命主義の反動化＝社会帝国主義化を自己批判＝批判した、輕井沢銃撃戦が貫徹されたこと、そして何よりも大切なことは、十二名を始めとする、ブンドー赤軍派—連赤—「新党」から生み出された、プロレタリア革命派は、その後の連赤総括論争に不克ち、鍛えられ、今や新たな発展期を迎えること、この意味に於て、ブンドー赤軍派の主客側面がプロレタリア的、マルクス主義的であったことは明瞭であつたこと、ブンドー赤軍派の副次的側面こそが、小ブル革命主義を反動化させ、連赤問題以降も「左」右の日和見主義、清算主義、テロリズムと経済主義、召還主義として、第三期を形成したことは明瞭なわけだ。

従つて、連赤問題に於ける正しい総括とは、ブンドー赤軍派の主客側面としての、プロレタリア的、マルクス主義的側面を継承・発展させてゆくべきこと、その副次的側面としてあつた、「左」右の小ブル日和見性は、非マルクス主義性を、徹底してこれと闘争して、止揚し、消滅させ、前者が、後者に規制されないよう、純化・止揚してゆかなければならぬこと、問題なのは、あの安保大会戦時では、この主客側面が、権力に弾圧され、更に一定の小ブル的論点をもつていて、争を党として止揚すべく、思想問題の解決を模索していたのだ。高原は、あの七〇年代頭初、受動型・待期主義の蜂起路線、右の日和見主義・清算主義路線に転向していくこと、一それもトロッキズムの觀点にたつてだー、これを塩見同志等に批判され、粉碎されるや否や、今度は一転して、自己の政治的保身の為に、安易な自己批判をして、極「左」日和見の超主観的な機械的前進運動ばかりの平板な少ブル革命戦略線に乗り移り、観念論の「世界史的第三段階論」—「左」右の日和見主義批判—党＝軍の、銃が党を指導する「軍事組織の党」の図式を主張し、塩見同志の制止を無視し、チヨコマカ動きまわり、指導部派をそそのかし、思想問題を軸にする綱領論争等を棚上げにして、軍事第一で、軍建設から党建設への、即時合流路線の急先峰の役割を担つていたこと、これは指導部派の対応と完全に一致するものであり、十二名の同志等プロ革派と真向から対立するものであつた。これは具体的にも、当時遠山同志を通じ、具体的に森君と強い接触をもつていたのが高原である点でも单なる路線的一致にとどまるものではない。ただし、森君はこの論理の部分のい部分は取り入れたが、高原の人格は拒否したこと、遠山同志は内容的には高原と異なっていた。従つて当然にも、高原と遠山同志は対立していた。つまり、あの七一年の秋、明確に「左」右の少ブル日和見主義・清算主義と、プロレタリア革命派との三分解が進行し、高原は、「左」翼日和見主義の

断固として、この副次的側面を止揚する闘争をおこなわず、中途半端にしたままで、この側面をノサバラしておいたこと、ここにこそ連赤の問題の眞の核心があり、又プロ革派が自己批判しなければならない点があつたこと、いずれにしてもブンドー赤軍派—連赤—新党志向の歴史的全体を總体として、清算するなんてのは漫画以外の何者でもないし、プロレタリエトードー赤軍派の副次的側面としての小ブル的・非マルクス主義的側面であり、これは止揚されるべきだ▽。

第二節 破産したのは、高原であり、高原に人格的に代表されていたブンドー赤軍派の「左」右の小ブル日和見性であること。塩見同志等、プロ革派に代表される主客側面は、あの七年秋の事態にも「左」右の少ブル日和見主義、清算主義と闘い、プロレタリア革命戦争の道を歩んでいたのであって、それ故に連赤問題の衝激からの立直りも早く、その後の混迷に對して一番適確に、正しい路線を打出し、全体を索引していくこと。

我々はこの際、はつきりとおかなければならない。獄中からの連赤肅清の推進力となつていては、當時、右の少ブル日和見主義・清算主義の傾向を代表して、松平や大久保に対抗し、その裏返しの位置にあつた高原であること、塩見同志等、現プロ革派を構成するメンバーの中心はこの論

指導部派の推進力であり、又その人格的代表であつたー少くとも論理＝図式理論上のーだから、連赤問題の本質をその具体性に於て語るならば、我々は敢て云わなければならぬ。連赤問題の直接の張本人は、高原であつたと。従つて、高原にとって、連赤問題の眞の総括とは、己れが「左」右の少ブル日和見主義・清算主義の人格的代表・推進力であり、最終的に破産したこと、塩見同志等プロ革派の路線が相対的には正しかつたこと、塩見同志と十二名とが、同じプロレタリア革命主義の路線を志向して、己れの破産をブンドー赤軍派や塩見同志に転嫁することなく、連赤問題の張本人としての己れ自身の総括を死にもの狂いでやりきること、ブンドー赤軍派のプロレタリア的・マルクス主義的主客側面の総括と、區別して、ブンドー赤軍派の少ブル的・非マルクス主義的副次的側面の人格的代表として、自らの少ブル性、非マルクス主義性を止揚したうえで、主客側面としてのプロレタリア革命派の総括を受けいれるべきなのだ。

第三節 ハブルジョア思想の居直りと責任回避、責任転嫁、観念論の唯心論のベテン、自己批判＝清算主義の芝居を批判すべく。

ところが、高原は己れが連赤問題の張本人であり、完全に破産したこと、塩見同志等プロ革派は相対的に一番正しかつたこと、自らが止揚されるべき、副次的側面の人格的代表であつたことを、卒直に認め、プロ革派に革命的に結集するこ

とが要求されたにも拘らず、再度決起することに恐怖し、ブンド・赤軍派の主容側面と副次的側面の区別をおこなわず、副次的側面を全体化し、そのことによつて、結局は高原は、十二名のプロ革派の同志達をも小ブル日和見主義者として、十把一からげに葬り去り——このことによつて、高原は、その内部にあつた、遠山同志を死に追いやつた、責任と反省を起点にして革命的再生をはからうとする残されたわずかの革命的志向を清算してしまつた——自らの破産をブンド・赤軍派の破産にスリカエ、自らの責任を、塩見同志等プロ革派に転嫁し、ヘドの出るような見エスイタ「自己批判」の芝居をうち、「破産した赤軍主義・ブンド主義を清算せよ！」と毒説を振りまき、権力や赤軍派脱落分子や反赤軍派少ブル諸派を勇気づけ、解党主義を奨励し、そのことによつて、自らの転向・脱走を画策してきたこと。この「自己批判」なるものが、自己の破産の責任の隠蔽、敗北の無縦括、赤軍派・プロ革派への責任転嫁であり、その方法が、観念論の唯心論、或いは史的観念論の代物であり、他面では、客觀情勢（歴史）に責任を解消する、自己の認識路線のブルジョア性にまで迫る真剣なつきつめた主体的総括など、一片も見られない、坊主さんげそのものであり、責任逃れのペテン、芝居以外の何者でもない。

「小ブルで御座居ました」「労働者の革命的階級の能力を信じてなかつた」「小ブルでプロレタリア革命を代行して果つもの真理がつくられること、高原にとって真理とは、自らの利害への效能が真理である。正に、プラマチズムそのものの、これは機械主義と官僚主義・行政主義信仰となること。同様に唯物論が基礎になく、あつても対立面の統一が、常に主客側面をもつと同時に、条件の如何によつては、相互転化したり、主客側面の内部に新しい矛盾の関係が発生、發生し始めること、従つて、対立面の統一に於て主客側面を強調すると同時に、それを常に条件的に主張する必要のあること。ところが、高原は、この主客側面を常に条件的にではなくて絶対主義的に把えてしまふこと。対立面の統一として、両面を把えるのではなくて常に一面主義になること、これ等は、レーニンが批判したブハーリン＝デボーリンのブルジョア思想であり、政治的には、極端から極端へ乗り移る、ブハーリンや王明の「左」右の日和見主義の反映であり、その認識論上の根源である、等々。そして、この階級的・社会的根源は、小ブル農民の上降志向としてのブルジョア志向、権力志向にあり、この権力志向は人民大衆を愚物視し、引きまわし、操作することを、自己の実存の証しとすること、等を源動力としている。これ等を自らの出生にさかのぼつてまで総括して、二度と誤ちを犯さないようにする、真剣な姿勢など全くないこと。反対に、これ等の高原のブルジョア認識路線や社会的階級根源の自己批判を否定し、これを正当化していること。

マルクスの「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業であ

そうとした」「テロリズムと經濟主義で御座居ました」。ケッ！全く、糞食え、ヘドが出ると云うものだ。よくも、平気でヌケヌケとこんな、陳腐極まる、言辞が吐けるものだ。ここには、七一年秋に於ける党内闘争や、高原の連赤問題の張本人としての主体的総括など一片もないこと。そして、高原のブルジョア認識路線としての、現実を唯物論の矛盾論としては合理的である」という認識論と同一の現実合理化論＝ブルジョア現実主義としてのブルジョア合理主義、ここに彼の合理・図式信仰とペテン、もろさがあること。矛盾の運動としてある物質を基礎にして、この反映として、諸現象を把えきれない結果、諸現象の側面を、完結した図式として、語ること、決して、唯物論的に語らないこと、それ故に図式は問われず完結し、再び物質、情勢が進展するや前の、図式は、何の適応性をももたず、それ故にこれを清算して、又新しい完成した図式をつくること、図式主義と清算と乗り移りの認識構造、この基礎にある、調査研究を重視しない観念論の怠けものの作風、「調査なくして発言なし」（毛）の作風と反対の作風。或いは、物質の運動が認識の主体でなくて主人公ではなく、高原の恣意、個人利害が主体となつてゐるが故に、真理は、高原の恣意の所産であり、今日は今日の真理があり、明日には明日の真理があり、幾つもの恣意に応じて、幾つもの真理がつくられること、高原にとって真理とは、自らの利害への效能が真理である。正に、プラマチズムそのものの、これは機械主義と官僚主義・行政主義信仰となること。同様に唯物論が基礎になく、あつても対立面の統一が、常に主客側面をもつと同時に、条件の如何によつては、相互転化したり、主客側面の内部に新しい矛盾の関係が発生、發生し始めること、従つて、対立面の統一に於て主客側面を強調すると同時に、それを常に条件的に主張する必要のあること。ところが、高原は、この主客側面を常に条件的にではなくて絶対主義的に把えてしまふこと。対立面の統一として、両面を把えるのではなくて常に一面主義になること、これ等は、レーニンが批判したブハーリン＝デボーリンのブルジョア思想であり、政治的には、極端から極端へ乗り移る、ブハーリンや王明の「左」右の日和見主義の反映であり、その認識論上の根源である、等々。そして、この階級的・社会的根源は、小ブル農民の上降志向としてのブルジョア志向、権力志向にあり、この権力志向は人民大衆を愚物視し、引きまわし、操作することを、自己の実存の証しとすること、等を源動力としている。これ等を自らの出生にさかのぼつてまで総括して、二度と誤ちを犯さないようにする、真剣な姿勢など全くないこと。反対に、これ等の高原のブルジョア認識路線や社会的階級根源の自己批判を否定し、これを正当化していること。

マルクスの「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業であ

そうとした」「テロリズムと經濟主義で御座居ました」。ケッ！全く、糞食え、ヘドが出ると云うものだ。よくも、平気でヌケヌケとこんな、陳腐極まる、言辞が吐けるものだ。ここには、七一年秋に於ける党内闘争や、高原の連赤問題の張本人としての主体的総括など一片もないこと。そして、高原のブルジョア認識路線としての、現実を唯物論の矛盾論としては合理的である」という認識論と同一の現実合理化論＝ブルジョア現実主義としてのブルジョア合理主義、ここに彼の合理・図式信仰とペテン、もろさがあること。矛盾の運動としてある物質を基礎にして、この反映として、諸現象を把えきれない結果、諸現象の側面を、完結した図式として、語ること、決して、唯物論的に語らないこと、それ故に図式は問われず完結し、再び物質、情勢が進展するや前の、図式は、何の適応性をももたず、それ故にこれを清算して、又新しい完成した図式をつくること、図式主義と清算と乗り移りの認識構造、この基礎にある、調査研究を重視しない観念論の怠けものの作風、「調査なくして発言なし」（毛）の作風と反対の作風。或いは、物質の運動が認識の主体でなくて主人公ではなく、高原の恣意、個人利害が主体となつてゐるが故に、真理は、高原の恣意の所産であり、今日は今日の真理があり、明日には明日の真理があり、幾つもの恣意に応じて、幾つもの真理がつくられること、高原にとって真理とは、自らの利害への效能が真理である。正に、プラマチズムそのものの、これは機械主義と官僚主義・行政主義信仰となること。同様に唯物論が基礎になく、あつても対立面の統一が、常に主客側面をもつと同時に、条件の如何によつては、相互転化したり、主客側面の内部に新しい矛盾の関係が発生、發生し始めること、従つて、対立面の統一に於て主客側面を強調すると同時に、それを常に条件的に主張する必要のあること。ところが、高原は、この主客側面を常に条件的にではなくて絶対主義的に把えてしまふこと。対立面の統一として、両面を把えるのではなくて常に一面主義になること、これ等は、レーニンが批判したブハーリン＝デボーリンのブルジョア思想であり、政治的には、極端から極端へ乗り移る、ブハーリンや王明の「左」右の日和見主義の反映であり、その認識論上の根源である、等々。そして、この階級的・社会的根源は、小ブル農民の上降志向としてのブルジョア志向、権力志向にあり、この権力志向は人民大衆を愚物視し、引きまわし、操作することを、自己の実存の証しとすること、等を源動力としている。これ等を自らの出生にさかのぼつてまで総括して、二度と誤ちを犯さないようにする、真剣な姿勢など全くないこと。反対に、これ等の高原のブルジョア認識路線や社会的階級根源の自己批判を否定し、これを正当化していること。

マルクスの「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業であ

そうとした」「テロリズムと經濟主義で御座居ました」。ケッ！全く、糞食え、ヘドが出ると云うものだ。よくも、平気でヌケヌケとこんな、陳腐極まる、言辞が吐けるものだ。ここには、七一年秋に於ける党内闘争や、高原の連赤問題の張本人としての主体的総括など一片もないこと。そして、高原のブルジョア認識路線としての、現実を唯物論の矛盾論としては合理的である」という認識論と同一の現実合理化論＝ブルジョア現実主義としてのブルジョア合理主義、ここに彼の合理・図式信仰とペテン、もろさがあること。矛盾の運動としてある物質を基礎にして、この反映として、諸現象を把えきれない結果、諸現象の側面を、完結した図式として、語ること、決して、唯物論的に語らないこと、それ故に図式は問われず完結し、再び物質、情勢が進展するや前の、図式は、何の適応性をももたず、それ故にこれを清算して、又新しい完成した図式をつくること、図式主義と清算と乗り移りの認識構造、この基礎にある、調査研究を重視しない観念論の怠けものの作風、「調査なくして発言なし」（毛）の作風と反対の作風。或いは、物質の運動が認識の主体でなくて主人公ではなく、高原の恣意、個人利害が主体となつてゐるが故に、真理は、高原の恣意の所産であり、今日は今日の真理があり、明日には明日の真理があり、幾つもの恣意に応じて、幾つもの真理がつくられること、高原にとって真理とは、自らの利害への效能が真理である。正に、プラマチズムそのものの、これは機械主義と官僚主義・行政主義信仰となること。同様に唯物論が基礎になく、あつても対立面の統一が、常に主客側面をもつと同時に、条件の如何によつては、相互転化したり、主客側面の内部に新しい矛盾の関係が発生、發生し始めること、従つて、対立面の統一に於て主客側面を強調すると同時に、それを常に条件的に主張する必要のあること。ところが、高原は、この主客側面を常に条件的にではなくて絶対主義的に把えてしまふこと。対立面の統一として、両面を把えるのではなくて常に一面主義になること、これ等は、レーニンが批判したブハーリン＝デボーリンのブルジョア思想であり、政治的には、極端から極端へ乗り移る、ブハーリンや王明の「左」右の日和見主義の反映であり、その認識論上の根源である、等々。そして、この階級的・社会的根源は、小ブル農民の上降志向としてのブルジョア志向、権力志向にあり、この権力志向は人民大衆を愚物視し、引きまわし、操作することを、自己の実存の証しとすること、等を源動力としている。これ等を自らの出生にさかのぼつてまで総括して、二度と誤ちを犯さないようにする、真剣な姿勢など全くないこと。反対に、これ等の高原のブルジョア認識路線や社会的階級根源の自己批判を否定し、これを正当化していること。

マルクスの「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業であ

もこんな事態を引き起さなかつたとしていることが上である。勿論、似かよつたような誤ちを犯しただらうことは考えられるが、若し、これが言ひすぎだと言うならば、塙見同志が指導権を掌握してしても同様な事態が生み出されたといふ風にいいきることは絶対に出来ないと言ひなおしてもよいが。いずれにしても清算主義者の如く、塙見同志が不当逮捕され、指導権を奪われていた条件を無視して、誰が指導しても赤軍派の路線にたつていった以上ああなつてはいたといった具合に、七一年秋の党内関係やそこに占める指導者個々の思想・指導力を無視するのは、「闘う前から敗北が約束されてはいた」敗北は「必然的到達点である」とする唯物論とは似而非なる観念論の先駆論である。連赤問題発生四年前の文章を引つ張り出し、この文章から、連赤問題発生の根源を解明しようとする志向などは、反党脱走分子や、権力や小ブル日和見諸派の反赤軍派策動以外の何者でもなかつたこと。高原は転向することによつて、今は、この使い古された必然的到達点論の観念論の手口を採用せざるを得なくなつたのだ。「路線は人が作つたものであり、情勢と階級関係がかわれば人は路線をかえる」とが出来る」という普遍的真理を高原は全く忘れてゐるわけだ。

第五節 △新清算主義宣言によって遠山同志等十二名を東切り、連赤公判の検事の立場にたつた、高原の最終的転向

高原は、新清算主義者宣言をやることによって、最終的にされてはいた。この具体的表現こそが、上田達の「連赤問題を我々の手に」の「人民に自己批判することは、一部遺族にて自己批判することだ」の主張となつて現れた。我々は、この高原の二重人格性に対し、前者を強調し、後者を取り除くよう要求してきたわけだが、高原は遂に、個人利害に拝跪して遠山同志等を裏切り、遺族の立場=高原の立場にたつたわけだ。

第六節 思想問題、革命的マルクス主義の獲得を拠点にしないが故に、高原には、過渡期世界論の革命路線の清算と毛教条主義=スターリン主義、ドブレ型党=軍のテロリズム路線への乗り移り以外になくなること。

連赤問題は、世界革命戦争の持久的対峙段階の到来、日本資本主義の根底的危機と革命情勢への過渡期の到来に対応する、思想路線の獲得の問題であり、このことの表現としての階級依拠路線の獲得の問題であった。そして、思想=階級依拠問題を起点にして、政治路線、過渡期世界論を継承=再構成(止揚しつつ)しつつ、他方では、「毛沢東思想を支持し、「毛沢東教条主義と反スタ・トロシキズムを同時相互止揚」し、ブル革命戦争か、蜂起か」の陣型論争を決着つけ、レーニンの「何をす」や毛沢東の党一軍=根拠地の陣型を継承発展させつつ、建軍・攻撃的蜂起の陣型として確立することとして

あつたこと。このような思想路線は、階級利益・階級原則にたち、階級勤務思想を打鍛え、党の認識・路線を整えることとして存在していくが、これは、他面では、十二名の同志達の立場にたち、この苦悩を共有し、その遺志を引き継ぐことを意味していた。このような十二名の立場＝階級勤務思想の獲得としての、思想路線の獲得の課題は、理論的には、マルクス・レーニン主義党的な綱領の原則的部分たる、弁証法的唯物論、史的唯物論、資本主義批判＝マルクス主義経済学の獲得という問題として存在していた。一言でいえば、革命的マルクス主義に立脚してゆくことを意味する。我々は連赤問題総括を、理論戦線の分野ではこのようになて、弁・史・資本主義批判の原則綱領の獲得→現代過渡期世界の対象の理論的把握（現帝論など）＝この歴史的把握としての国際共産主義運動史の総括（勿論、この中の重要な分野として日資論争と日本共産主義運動の総括が入っている）党建設の理論と陣型の理論、といった構成順序で、理論戦線の分野での連赤総括を推進してきた。言いかえれば、小ブル革命主義の性格をもつた（相対的には、プロレタリア的・マルクス主義的といえる）過渡期世界論の革命路線を、マルクス主義の原則的部分をキーポイントにして、この下降した地點から再構成し、継承・止揚すること、教条主義や清算主義を排すること、反スタ・マルクス主義哲学や経済学やスターリン哲学や経済学をともに克服すること、スターリン主義やトロツキズムを

遠山同志等十二名のプロ革派の立場にたどり、その遺志を引き継ぐことから最終的に脱走し、十二名の立場を、血縁や労働力の再生産構造としてのブルジョア家族制度に対するなんの反省もなく、家族の論理に立脚して、一部報復主義の遺族の立場にたつこと、更に一步進んで、連赤公判の検事の立場にたつことにスリかえてしまい、帝国主義と社会帝國主義に屈服してしまった。高原は、他の人から面と向っては指摘されなかつたが、己れが連赤問題直接の張本人であることを知つていたが故に、それでも、殺された十二名をプロレタリア革命派として復権することに反対し、これを己れの再生のバネにしてようとしていた。殺された十二名の苦闘を共有し合うことによつて、この思想的當為を、同盟再建のスプリングボードにしておくこと、これが、我々プロ革派や高原や上原との共通項ともなつっていた。他面では、このような苦闘が他面では、己れ自身のブルジョア性の全面的総括、破産の確認と、プロ革派の承認と結集につながるが故に、必死でこれに抵抗し、自己正当化してゆこうとする志向ももつていた。後者は、遠山同志の遺族の権力と社会帝國主義の手先としての報復主義への迎合・屈服を基礎として、「十二名に自己批判することは、遺族に自己批判することだ（つまり高原にだ！」）と称して十二名の立場=遺族の立場にスリカエつつ、己れの責任を棚にあげ、自分は「赤軍派の被害者だ→赤軍派を清算・解体する」といった、帝国主義と社会帝國主義、検事の論理に發展

批判し、毛沢東教条主義を批判し、毛沢東思想を正しく評価すること（相対化して）、陣型論争を、綱領をもつた党建設の闘いと階級依拠路線を環にして、主体の側から（対象分析を深めつつも）解決してゆく観点にたち、「左」右の小ブル

日和見主義の教条主義・清算主義革命戦争路線や蜂起主義を克服することをめざした。ところが高原は、そもそも連赤総括からして十二名の立場にたたず、一部の遺族の立場にたち、思想問題に照準を据え、資本主義批判（賃金奴隸制批判）と階級依拠路線を獲得することを連赤問題の拠点に据えず、従つて、上した分野の毛沢東思想の評価をめぐる国際共産主義運動の総括や、陣型論争に關してアレカコレかの、例によつて例の如くの、二者択一の「毛沢東教条主義（スターリン主義）かトロッキズムか」「小ブル革命戦争か蜂起主義か（「左」右の）」かの問題設定をして、毛沢東教条主義と小ブル革命戦争路線に自己を純化し、論陣をはつた。そして、トロッキズム批判に名をかりて、スターリン主義＝毛教条主義に乗り移り、「ブンド、赤軍派をトロッキズムと毛沢東思想の折衷」として、レッテルをはり、毛教条主義＝スターリン主義を清算主義の理論的・路線的名文にしようとするわけだ。この点で、高原とブル革派は、毛沢東思想を支持、評価する点でも根本的相異が当初から存在し、陣型論争でも同様なことがいえた。これは、「過渡期＝社会主義」を認めるのか、否かの違いや、党＝軍の「鉄砲が党を指導する」、軍事

を磁石にして、主体的に批判することを放棄したりする誤ちとなつて現れていること。総じて、史的唯物論のスターリン的歪曲や俗流化、資本主義批判の修正や俗流化、史的唯物論への解消となつて現れていること。賃金奴隸制の生産関係、階級関係を暴露するには、資本制社会は、私的所有・生産と社会的分業を基礎とするが故に、生産物が交換を通じて商品化することを通して成立する商品経済社会であり、それ故に、人ととの労働、社会的関係が、物と物との関係、商品価値を媒介にして表現されざるを得ないこと。それ故に、商品価値の分析を通じて、人ととの関係＝賃金奴隸制を暴く、マルクス主義経済学に立脚しなくてはならないこと。つまり、史的唯物論の命題・公式は、資本制商品経済の法則を解明したマルクス主義経済学によって立証され、又、マルクス主義経済学は、史的唯物論の助けをかりて自らを完成させることが出来る。という関係がわからず、スターリンにならつて、資本主義批判故に、資本主義批判と史的唯物論の公式に解消してしまった小ブル主觀主義の誤ちを犯している。ことは、「資本制社会では、剩余労働が何故剩余価値として搾取されることになるのかーむきだしの剩余労働の搾取とはならず」を説明できない価値論をき「剩余労働の剩余価値としての搾取論」の同義反復的強調となつて現れたり、更には、「剩余価値論は生産関係の工場内での暴露、蓄積論は全社会的暴露、それ故、剩余価値を強調するのは一面的で、経

の自然発生性に排した、小ブル組織論を支持するか、否かの相異として鋭く現れた。

第七節 資本主義批判の核心、賃金奴隸制の生産関係批判、剩余価値の搾取を、「労働と所有の分離」批判、蓄積論に一面化し狭める経済主義、資本主義批判の俗流化。

このよう二者択一の清算と乗り移りを批判され、それが、高原の思想上の主体的総括の欠落、自己のスターリン主義認識路線の正当化であること、を我々によつて批判された高原は、思想問題、資本主義批判等、マルクス主義の原則的部分の重要な性を認める振りをしつつ、革命的マルクス主義の獲得の志向を、スターリン哲學とスターリン経済学の獲得にスリカエ、そのことによつて、自己のブルジョア的認識路線＝スターリン主義的認識路線の傾向を正当化し、より一層堕落を示したが、そして、一乗り移りを党派性にして、「ス

ターリン主義、毛教条主義に徹しなかつた」ことを、脱走の理由にあげる始末である。これは、資本主義批判の分野では、

その核心が、賃金奴隸制の生産関係の批判にあることを否定

し、その一部の蓄積論の分野の「労働と所有の分離」に狭め

一賃金奴隸制の生産関係のもとでは、生産関係

産されるのは、であり、従つて、賃金奴隸制は、労働と所

有の分離を含む一賃金奴隸制の生産関係そのものの批判を否

定すること。或いは、マルクス主義経済学の資本主義の核心

が、剩余価値論にあることを否定し、資本主義を剩余価値論

溶渁主義で、蓄積論を強調するのが革命的」といった、くされ

きつた反マルクス主義の論理構築となつて現れたりする。こ

れは、剩余価値論も、蓄積論とともに全社会的な生産関係＝

賃金奴隸制を暴露していること。両者が資本の運動の部面に

於て、前者は、資本の生産の次元での全社会的生産関係を暴露し

し、後者が、資本の蓄積の次元で全社会的生産関係を暴露し

ているのであって、相異しているのは、資本の生産と蓄積と

いう、資本の生活史の運動の部面の相異であることがわから

ず、剩余価値論と蓄積論の相異を、暴露の対象の空間的範囲

にみいだしたりする誤ちである。資本論の商品と貨幣、貨幣

の資本への転化、資本の生産、資本の蓄積、資本の再生産と

流通、資本の分配は、各資本の生産の部面で、それぞれの部

面に応じた、工場をも含む、全社会的な生産関係を暴露・批判しているのであって、どれか一つだけが工場内の生産関係

を暴露し、他のどれかが全社会的生産関係を暴露しているわけではないこと。又、マルクスの直接的生産過程では、何も

場所的に限定されていくわけではなく、資本の直接的生産

つまり、剩余価値の生産を意味し、資本の蓄積（再生産）に

対応する概念であること。今一つのこの誤ちは、剩余価値論と蓄積論を対立的に捉え、その有機的連関性を把握していない

ことです。つまり、剩余価値の生産による資本の生産、その

生産された剩余価値の資本への転化としての資本の拡大再生産、資本の蓄積といった関連で、資本蓄積の芯棒には、剩余

価値論が存在し、磁石となつてゐるとして捉えず、このことを無視して、蓄積論を強調すると、資本主義の立体的・重層的批判ができなくなること。剩余価値論なきドーナツ型蓄積論などのはお化けもひととこと。資本の蓄積と、あるいはその蓄積に応じた資本関係の拡大再生産（労働と所有の分離）は、あくまで、資本制生産関係＝賃金奴隸制を前提にし、そのもとの剩余価値の生産を源泉にして成立している以上、あくまで剩余価値論の展開形態であり、賃金奴隸制の結果であること。剩余価値が搾取されることそれ自体が資本関係の強化・再生産なのだ。たとえ資本蓄積に伴う資本関係の再生産が、次の剩余価値の生産や賃金奴隸制の生産関係に繰込まれ、結果が前提に循環してゆこうとも、この前提と結果の関係がわからなくて循環論に迷い込むと、赤報や旭風君の如き、資本主義批判の核心が蓄積論にあるかの如き混乱に陥らむこと。高原などは、赤報や旭風君以前で、大体、史的唯物論の命題や公式をマルクス主義経済学で論証しようとする志向すらなく、資本主義批判をアブリオリに史的唯物論の公式をスターインにならつて代行させようとしていること。「資本による搾取や支配だけを強調して、プロレタリアートが社会化した生産力を代表し、新しい生産関係を代表していることを失つてゐる」なんて主張は、プロレタリアートが資本制生産関係のもとでは資本の生産力として存在し、資本の可変資本部分として、賃金奴隸として存在し、この否定を通して革命的会主義として、社会主義を世界史の発展区分から追放し、資本主義一国プロ独＝社会主義世界プロ独＝世界社会主義世界社会主義の珍奇な発展区分にかかること。一国での社会主義にも、二所有制と單一人民所有制では区別されねばならず、過渡期世界の社会主義と世界社会主義とは、その発展段階に相異があることがわからぬこと等々の、共産主義論、過渡期論の誤ち、中国継続革命路線のマルクス・レーニン主義の立場にたつた正しい評価を勝ちとる闘いを否定し、マルクス主義を修正するようを誤ちにも发展していふること。

又、日本革命の路線に関しては、連合独裁＝民族解放・社会主義の二段階戦略の修正主義路線になつてゐること。いかえるならば、高原は毛教条主義故に「スターリン主義かトロッキズムか」の問題設定をやることによつて、あつさりと、安易に、トロッキズム批判に名をかりてスターリン主義に乗移り、この乗り移りを党派性にして、ブンドと赤軍派を、「スターリン主義、毛教条主義に徹していかなかつた」「中核に勝てなかつた」とか、全く抱腹絶倒の批判をやり、清算していくこと。

第八節 理論上の小ブル 革命戦争＝テロリズム「鉄砲が党を指揮する」、軍事の自然発生に排踐した、ドブレ小ブル組兵論の「軍事組織の党」、実際上の経済主義と軍事・政治招換主義・サークル主義。

一、現代帝国主義の蓄積構造からして、平時からプロレタ

階級としての能力を身につけてゆくこと。いわば、プロレタリアートは、資本によつてその革命的能力を一度否定され、更にこれを否定しなくては、つまり、否定の否定としてのみ社会化された生産力となり、革命的階級として成長できることをおさえてない点で、資本主義の下で社会改良が可能とか、原式、スターリン的、資本主義批判にもとづく経済主義批判なるものは、主義の居直り以外の何者でもないこと。このような誤ちは、彼が連赤問題を、思想問題を起点にして捉え、十二名の立場にたつて階級勤務思想を獲得しようと努力しようとせず、反対に、自らのブルジョア的認識路線、ブルジョア思想、スターリン思想を正当化し、腐敗・堕落を深めたことに根源がある。このような「スターリン主義かトロッキズムか」といった二者択一の問題設定は、その他「革命が戦争をおしとどめるか、戦争が革命をひきおこす」の前段階決戦の戦争と革命の時代規定を、戦争後の革命路線に修正し、世界赤軍建設を否定、世界赤軍＝世界革命戦線の陣型を否定し、世界赤軍建設を否定、社会主義が共産主義の段階であることを否定し、過渡期＝社会主義戦争が發展してゆく物質的基礎が成熟してゐることは何度も確認してきた。このことは、日帝にあつては、七年石油危機以来、あるいは、インドシナ革命戦争の前進・中國革命の前進・朝鮮機危と日米両帝の朝鮮侵略反革命・日帝のなしくずしファシズムの権力再編の深まりといつた特殊な日本資本主義の現動向からしても明瞭なことである。工業資本主義国は高度に發展した單一の有機的商品経済であり、それを指導する権力も全国的規模で中央集権的に單一に組織されている。

植民地国・半植民地国の民族民主主義革命における陣型・軍事法則は、植民地の封建経済は、それ自体は單一の中央集権的商品経済ではなく、地方ごとに分割され、権力も地方ごとに分割・分拠し、互いに争い合つてゐた故に、地方ごとに、その弱い部分に政治・軍事力を集中し、権力を各個に解体し、解放区＝根拠地を築き、つぎつぎに陣地を拡げてゆく、陣取り合戦の軍事法則はまったく通用しない。

このような支配構造の中では、権力の弱点は、資本主義と権力自身單一に中央集権的に組織されると同時に、プロレタリアートも單一に、全国的に組織される条件をもち、プロレタリアヘゲモニーを全国の資本制生産の單一の有機的身体の全局部に浸透させ、配置し、プロレタリアートの予備軍を組織し、駐留させておくことが可能であること。

そして、とりわけ、全国政治斗争单一全国決起の中で、こ

の常備軍を訓練し、プロレタリア正規軍に鍛え、強化、拡大したり、敵階級の政治的弱点、政治危機を利用し、敵階級兵力が政治的・軍事的に集中されきてない条件を利用して、味方の兵力を集中し、政治斗争を内戦化してゆくことが可能である。

政府危機・政治危機の深まりと、他方での党建設の前進、

党的下に組織された常備軍の拡大は、ある段階で、両階級が政治的・軍事的に対峙し合う内乱的事態を生み出され、次の全人民総蜂起から内戦＝世界革命戦争の反攻戦へ発展してゆくような局面が生み出されてゆくことが想起される。

このような分析は、より具体的な日本資本主義とその政治情勢の分析や、資本主義社会の、とりわけ、三〇年代の内乱

一内戦期の政治構造の分析の中で探ってゆくべきである。

あらゆる階級斗争の社会主義政治斗争としての組織化、とりわけ、全国的政治斗争の組織化、この中の組合主義的、民主主義的、社会改良的、ゲミニーとの斗争の組織化、独自のマルクス主義のプロ独政治の外部注入の遂行、これをテコ

に、同時平行的に、その武装的發展・内乱化、戦争化、総蜂起化をめざす方向で、独自に計画的なグリラ戦の、政

斗争の継続的發展としての追求と、これを大衆の自然力的な破壊力を持ち合せてゆくこと。

このように考えれば、武装斗争・軍隊は、政治斗争のルートの中、労働者階級に結びつきつつ、しかも党的指導の下

論を超主観的に、現代帝国主義の危機構造、依拠階級の動向の分析など全くないまま、超主観的に日本にあてはめて、小ブル革命戦争路線はまったくのテロリズム以外の何者でもない。これは「左」翼日和見主義の高原の小ブル主義革命戦争路線の固執以外の何者でもない。

二、以上、プロレタリア革命戦争の陣型とその客観的諸条件の方からみてきたわけだが結局、ここから引き出せる結論は、プロレタリア革命戦争＝建軍＝攻撃的蜂起の陣型論の核心に、プロレタリア階級を正しく綱領にもとづいた職業革命家で構成される全国政治新聞の中央集権の統合拡充によるプロレタリアートの階級的形成がすえられなければならぬこと、このことです。

レーニンは、。。。斗争条件に即応し、爆発や市街戦だけを想定したり、じみな日常的斗争の暫進的歩みだけを想定して組織を建設するのではなくて、爆発や沈滞などの時期にも弾力的に対応し、沈滞の時期にも党的名譽を威信し繼承性を救う、組織によって共産主義と労働運動を結合させ、全民蜂起に備えんとしている。

この党的建設の前進の中で、この一つの成果として、党的建設を中心として、プロレタリア人民の常備軍をプロレタリア党的路線にしたがつて組織してゆくこと。

この常備軍は「党的全国的、包括的、政治的煽動にしたがふ、民衆の自然力を破壊力と革命家の組織的・意識的な破

に独自に組織され、鍛えられ、訓練され、発展してゆくことは明瞭である。

いずれにしても、現代帝国主義のプロレタリア革命戦争は、この政治斗争と、この内乱的・内戦的發展からハジキ出され

た階級と分離した階級のいる、純粹軍事上の觀点からのみのテロリズム、小ブル革命戦争路線は、全く問題外である。あるいは、理論上はテロリズムだが、実践することもできず、ただ招還する赤報等の軍事召還主義、召還テロリズムとも問題外である。また同様に、資本主義の原因ではなくて、結果にのみ反対して、資本主義の改良をめざす組合主義や議会主義、あるいは、この組合主義や議会主義、民主主義斗争を批判し、労働人民を社会主義のプロ独政治の下に組織し、党・軍建設を推進し、建軍・攻撃的蜂起の陣型構造をめざす仏派峰起主義派は問題外である。烽火派やマル青同、あるいは旧清算派 etc。

以上からして、高原のとき、マルクスの時期＝政治斗争、レーニンの時期＝政治斗争、毛沢東と我々の時期＝社会革命と革命戦争の時代とかいつた階級斗争の世界史第三段階論の観念的図式だけで、日本現代帝国主義のプロ革命戦争＝政治軍建設を推進し、建軍・攻撃的蜂起の陣型構造をめざす仏派峰起主義派は問題外である。烽火派やマル青同、あるいは

以上からして、高原のとき、マルクスの時期＝政治斗争、

レーニンの時期＝政治斗争、毛沢東と我々の時期＝社会革命

と革命戦争の時代とかいつた階級斗争の世界史第三段階論の観念的図式だけで、日本現代帝国主義のプロ革命戦争＝政治軍建設を推進し、建軍・攻撃的蜂起の陣型構造をめざす仏派峰起主義派は問題外である。烽火派やマル青同、あるいは

の党」なるものは、赤報派の「左」翼日和見主義の一部にあつた「党＝軍」の「鉄砲が党を組織する」「軍事がなければ政治もよくなる」とかいった軍事の自然発生性に排した自然成長論の、ゲリラから党への戦斗団主義であり、ドブレ理論の定式化以上の何ものでもなく、まったく反レーニン主義・反毛沢東思想的シロモノでしかない。またこれは、党員全員の武装、政治軍事組織の政治による統一とその系統の獲保、中央軍をはじめとする各級各部局の軍事力の保持育成の四原則からなる非合法の武装した赤軍組織の建設の路線に敵対するものである。

高原はドブレ式、党＝軍の組織論だけの主張だけでは、あまりに小ブル革命戦争のラジカリズム路線がむきだしであるので、「何をなすべきか」をもちら出して若干の手直しを施し「軍事組織の党であると同時に全国政治新聞の党」とか「武装斗争と同時に宣伝・煽動を組織化を遂行する」とか、何の内容的分析できないまま、ことばだけを列べたて、ドブレ主義とレーニン主義の「何をなすべきか」を折衷する挙にててきた。そして経済主義批判に名をかりてテロリズムをおおいかくさんとしてくる。

しかしこの折衷は、資本主義の客体条件の分析や党建設を主柱とする建軍・攻撃的蜂起の路線をとり得てない点で全くの折衷にすぎず、基本的には変則型テロリズムでしかなく、テロリズムによる「何をなすべきか」の歪曲・修正以外の何

とを理由に、現存するすべての階級斗争を民主主義斗争とレッテルをはって、すべての階級斗争を党の独自の斗争を通じて、とりわけ、全国民的政治斗争を共産主義をめざす政治斗争に組織し、それを武装化・戦争化してゆく斗いを放棄し、これから招還し、観念の中でのみ存在する「社会主義をめざす政治斗争」を「武装斗争」を追求しようとする。これはまったく、テロリズム、軍事清算主義・政治召還主義以外の何者でもない。すべての階級斗争から招還することによって、現実の階級斗争の現場にいる労働者人民を経済主義の風潮にさらしてしまっていること。したがって、高原の「階級斗争の政治斗争としての組織化反対」という論拠は「左」からの経済主義の助長でしかない。このような召還主義、テロリズム、経済主義の理論的論拠は、自然発生性と自然発生性への排を混同し、自然発生性の中の目的意識性の萌芽形態、自然発生性への排と規定し、これを共産主義へと打固めてゆくことを放棄する考えにその理論的基礎をもつてゐる。また、もちろん、武装斗争をテロリズムだとしても追求する姿勢などまったくない点で、要は、武斗からも、政治斗争からも招還する、単なる左翼談議を行なうサークル以外何者でもない。

三、なお高原は、連赤問題の組織論的総括として、党＝軍革命戦線の陣型は、相対的安定期の階級関係を反映して、党一軍が。。。的にプロレタリアートを代行して斗つて、その衝撃で、党一革命戦線がプロレタリアートを経済主義的

者でもなく、テロリズムに『全国政治新聞』をもうしわけ程度につけたしたにすぎない。これでは、経済主義批判も正しくやれず、反対にテロリズムの裏返しとして経済主義を助長することになること。

党の目的意識的建設によつて共産主義政治を組織し、党の武装と軍建設を推進し、あらゆる階級斗争を政治斗争に組織し、とりわけ社会主義的な全国民的政治斗争を組織し、それを武装化・内乱化・戦争化してゆくことを通してはじめてプロレタリア人民は、組合主義と民主主義政治の反動性を理解してゆくこと。この政治のルツボを創出し、その中でプロレタリアートの政治的発展、階級的自覚を促進し、党・軍建設に打ち固めて経済主義を批判・克服してゆくことができるここと。また革命斗争を通じて改良の副産物を獲得することができることができるのだ。あるいは、ファシズムに対しても民主主義を対置し、戦争に平和を対置することができるのだ。

ところが高原は「組合主義的経済斗争や民主主義的政治斗争は、それ自体はプロ独の社会主義をめざす政治斗争には高まらない」との理由でもつて、あるいは「これらの斗争の延長に武装蜂起を想定できない」という。それ自体は正しい命題を理由にして、逆に。らが党・軍建設の斗いを組織しきれず、共産主義と労働運動を結合させる能力をもちえてないこ

に組織するものであった。ことさらに、この構造は、党一軍のテロリズムと、党一革命戦線の経済主義の二つの傾向の对立を助長し、それを「党」なる個人の原則なく、気。。。調停する構造であった。それゆえに、このテロリズムと経済主義の二つの傾向を克服するには、階級形成、党建設の二元論の二本立て路線を清算し、「軍事組織の党」一階級の陣型にすべきだ、と主張している。

これは、これまで述べてきた軍が党を指揮する小ブル組織論であり問題外であるが、このことを関連させて述べるならば、次の点で誤つてゐる。第一は、相対的安定期の労働者本隊を、社民や社会帝国主義が制圧してゐる中では、社会主义革命をめざすブンド等革命派は、まず学生戦線を掌握し、学生運動の力を利用して、労働戦線の革命的ヘグモニーを獲得してゆかんとする変則的方法や形成の方法を余儀なくされた。これは、当時の条件では、唯物論的対応で正しく「代行主義」だとかいつて、なんら否定されるものではない。このような主張は。。。学生運動の革命運動・党建設にはたした役割りを清算する点で、権力や日共と同じ観点である。また、このような、変則的方法が党建設を、学生の小ブル性に持させることを留保していくし、独自の党建設を。。。組織化もめざしていた。学生官僚の高原などがブンドの副次的側面として「代行主義」などの主張を実践していくとの告白にすぎないこと。第二には、党一軍が斗つて、この成果を革命戦

線に組織化してゆくこと自体、なんら誤まりではなく、むく

原則的で正しいことである。あるいは、党が革命斗争を追求する限り、党的軍機能と党的組織機能とは矛盾をもち、テロリズム的傾向や経済主義的傾向に陥り込むことは避けがたいこと。この矛盾は、組織形態をイジタルことによって止揚されるのではなくて、党的正しい政治指導においてのみ止揚されてゆくものである。また、党中央が、この矛盾を止揚・統合してゆくのであって、これは「調停」でもなんでもないこと。このような「党なる個人による調停」という見解は、党的中央集権的指導を否定する、政府主義・自由主義的傾向を表現している。問題なのは、○○の赤軍派は、正しく思想路線・政治路線、階級依拠と路線を止揚する途上にあり、止揚することができなかつたことであり、この○○上の思想・政治面の限界こそ自己批判されるべきであつて、この政治的限界の結果として、党を軍事組織に一面化するドブレ主義の「軍事組織の党」などの觀点が生まれたり、あるいは、烽火式の党を民主主義闘争や組合主義運動の推進者に随伴させる傾向が生まれたことこそ○○されたべきなのだ。

第三は、このような見解は、階級形成＝党形成の一元論を理解せず、○○○○。「軍事組織の党」があるだけで党フラクションを中心にして赤軍を建設したり、ソウエット型共闘組織を指導する任務を放棄している点で、党を大衆組織を二元的に把え、○○に○○を解消する二元論の傾向の裏返しの產を棚にあげて、マル青同は、ブンド系諸派の攻撃の為に、あるいは、マル青同の指導者○君が、ブンド＝赤軍派でありながら、ML派に乗り移つた、清算主義の過程を正当化するものとして、使用しているわけだが、高原は、マル青同と○○○○将来の自己の身売りの為にも、マル青同の「ブンド主義の○○を一掃せよ！第三期を清算せよ！」というスローガンの旗振りに、より一層精進するわけだ。しかし、このレーニンの「第三期を清算せよ！」というスローガンは、臨總派やマル青同や高原が考えるのとは、まったく意識を異にしていたこと、このことを、清算主義の日和見主義を粉碎する為にも、あるいは、日和見主義からレーニン主義を防衛する為にも若干説明しておく必要がある。

レーニンは、「何をなすべきか」の中で、ロシア社会民主党の時期を次の三つに分けて分析する。その第一期は、一八八四年～一八九四年のロシア社会民主党の理論と組織が成立し、確立された時期、社会民主党は、未だ労働運動と結びついてなく、幼時期の過程。第二期は、一八九四年～一八九八年に至る時期で、社会民主党が社会運動として、政党として、人民大衆の高揚にのって、この世に現われる幼年期から少年期の時期である。インテリの間でのナロードギ主義と闘ひ、労働者に近づくことや労働者の間でのストライキに対する一般的熱中が拡大する時期。運動は巨大な发展を遂げ、彼らの活動の規模は非常に広がつた。しかし、指導者のレーニンそ

一二元論である。

第四に、連赤問題に即して述べれば、この路線は、最終的には、党を軍に解消してゆくグリラ主義の党＝軍の指導派の見解であり、この指導部隊を、党＝革命戦線の経済主義・蜂起主義の「左」右の日和見主義を批判し、両者を克服せんとした各級・各部局の軍、といった四側面をもつた、武装した非合法の赤軍派の党組織建設の路線を否定する見解である。

第九節 止揚すべき第二期を清算し、清算すべき第三期を切り拓く、倒錯した歴史評価レーニンの「第三期を清算せよ」の革命的意義について。

高原の清算主義の論拠のひとつには、レーニンの「何をなすべきか」の結論・結語の「第三期を清算せよ！」の完全にまちがつた理解がある。高原のことき輕薄分子は、「何をなすべきか」をしつかり読まず、ただ自分の恣意の為に利用するだけであるが為、レーニンが清算主義のスローガンを掲げたから「清算主義のスローガンを掲げてもまちがいなからう」「清算主義はあるがち唯物弁証法的方法ではないとはいきれない」と浅はかに考え、「破産したブンド主義・赤軍主義を清算せよ！」のボロ旗を掲げたわけだ。

この「第三期を清算せよ！」は、最初、臨總派によつて使はれられ、その後、マル青同が広汎に使用している。仏派の人やこの時期に革命運動に参画した大多数人は、まったく若く人々で、実践活批の訓練に不足し、驚くほど急速に舞台から去つてゆく時期。いわば、自然発生的高揚の時期であった。第三期は、一八九七年～一九〇二～三年の時期の、分散・崩壊・動搖の時期で、運動そのものの成長・前進に對して、指導者たる日和見主義が自然発生性への拝跪となつて現われる時期であり、分散と同様がラジカリズムや経済主義のいざれにも譲歩するような時期であり、科学的社会主義が一知半解の雑炊と講。にかけられていつた時期である。第四期は、この分散と動搖、ばらばらのさまよいを革命的マルクス主義の確立をもつて突破し、日和見主義者の前衛と交替して、革命的階級の真の先進的部隊が追求してゆく時期と。

このようにレーニンは、ロシア社会民主党の歴史区分をおこないつつ、そのうえで第三期の日和見主義の時期、経済主義とテロリズムとそれへの浮動、さまざまの時期を清算せよ、と主張しているわけだ。従つてここで清算の対象は日和見主義であり、けつして第二期の弥闇的高揚期の、未熟で自然発生的な戦闘的マルクス主義を清算の対象としてはいないうと、むしろレーニンは第二期には好意的で、止揚の対象として把えていること、このことです。けつして第二期を清算して第三期に転落するようなことはしていないこと。ところで、このようなロシア社会民主党の發展区分を日本のブンド運動の發展区分に機械的に照應させて、現在点を把えることは、

必らずしも科学的方法ではない。しかし、敢えて清算主義者がこのような方法を採用する以上、我々もこの方法を留保つべきで採用して、できるだけ論争の性格を鮮明にさせておくことが便宜だと考える。

ブンド運動の第一期は第一次ブンドであり、第二期は第二次ブンドと赤軍派一連合ブンドの時期である。第三期は連赤敗北以降の経済主義とテロリズム、そしてこの両極への浮動とさまよいの日和見主義・清算主義の、この七一年（七五年頃の時代である。だからレーニン主義に従うことは、第三期の「左」右の小ブル日和見主義・清算主義の時代こそ清算しなければならないこと、第二期の第二次ブンドと赤軍派（連合ブンド）を清算して清算主義の第三期に転落することは全くないこと、ところがだ、レーニンとは正反対になんと高原やその他の清算主義者は、継承・止揚しなければならない第二期を清算し、清算しなければならない第三期を「切り拓いた」わけだ。

自然発生的で未熟なマルクス主義を止揚するのではなくて、反対にこれを清算し、日和見主義を擁護したこと、これこそが清算主義者のスローガンの本算であること。だから我々はこの日和見主義に対して、「第三期の清算主義の日和見主義こそ清算せよ！」と呼びかけなければならぬのだ。高原の如く、ブンドと赤軍派の時代を自然発生的に戦闘的マルクス主義の時代と見えるのではなくて、「テロリズムと経済主義題発生以降は、この連赤一新党が到達した地平と課題に我々以外に誰もが答えることができず、この課題の存在すら把握ことができず、自然発生性への掛けが「左」右の日和見主義・清算主義としてのテロリズムと経済主義として定着し、この両極を浮動し、さもよう俗流講談マルクス主義・諸清算主義・日和見主義、「マルクス主義が右往左往し、登場したのだ。正にこの時期こそがレーニンがその清算を主張した第三期であり、テロリズムと経済主義・清算主義・日和見主義の時代であり、この時期こそ断固清算し、清算主義に終止符をうち、プロレタリア革命主義の革命的マルクス主義樹立の旗を掲げて再前進してゆかねばならない時期なのだ。すなわち、歴史の弁証法は第三期の清算主義＝日和見主義と闘い、第二期の戦闘的だが未熟で自然発生的な戦闘的マルクス主義を成人した革命的マルクス主義に揚棄しなければならないことを鮮明にしてきているのだ。高原はこのよう厳然として存在するBUND赤軍派の歴史的区分を曖昧にして、とりわけ第二期と第三期が連赤問題を境界にして区分付けられることを曖昧にすることによって自らの清算主義と闘い、第一期を第三期にシリカエ、小細工を施して、継承・止揚すべき第二期を清算し、清算すべき第三期を防衛する的ハズレの大間違いをヤラカシ、赤軍派＝プロ革攻撃に血道をあげて、プロ革派に対しても「自分（高原）が破産したことにあげて、プロ革派に對して「自分（高原）が破産したこと

の双生児の時代だ」とか「小ブルがプロレタリアートを代行して革命をやろうとしていた」とか「学生運動が闘かってその衝撃で労働者を組織しようとした」とか把えるのは、第一次ブンドと赤軍派への冒瀆以外の何ものでもない。あの十八や十一・十二斗争はどうなったのか、反戦青年委員会運動や地区党建設、或いは産別委員会の創設の闘い、そして三里塚やアスペックや十・二一防衛戦闘争、更には東大闘争 etc、そして赤軍派やブンド諸派の安保大会戦での闘い、これ等を信じる人がいるとすれば、よほど馬鹿か、よほど悪賢い人物であり、他意の為に意識的にデータラメを吐いているものと言える。

連赤問題は世界革命戦争の対峙段階への到達、日本階級斗争の革命情勢への過渡期の到来という情勢の中で、自然発生的で未熟な戦闘的マルクス主義では一步も前進できないよう本地平に到達する中で、思想問題を中心にして、階級依拠路線と一体に「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への止揚」「毛沢東思想を支持して、反スターローヴィズムと毛教条主義を同時相互止揚する」革命的マルクス主義の綱領問題と革命党の建設、そしてこの綱領一党建設一階級依拠路線を中心にして、小ブル革命戦争（テロリズム）と峰起主義（経済主義）を克服した建軍攻撃的峰起の陣型を獲得するといった課題が問われたことをその本算としている。そして連赤問題を認めたのに（つまり、革命を断念したのに）、プロ革派は自分達をマルクス主義的・プロレタリア的であつて、革命闘争を断固続けるというのがしからん」「プロ革派も一時に革命運動から脱走すべきだ」「プロ革派の延命を許すな！」といつた、およそ常識では考えられないような倒錯しきった転向へのまき添えの主張をする。

高原は自分が小さな甲らしかもつていなかから、赤軍派＝プロ革も同じだと思ふこむよろな、全くタワイもない論理を展開しているわけだが、これは赤軍派＝プロ革派の寛容さ、包括性につけ込まんとする幼児なみの甘えきつた言葉である。我々は高原の如きスターリン主義者の小ブル日和見主義分子が、同盟再建の闘いから脱走するのを一大いに批判するが、基本的には大いに歓迎するものである。我々はこのような階級的異分子を徹底して粉碎することを通して、プロレタリア革命主義を純化してゆくことを明らかにするものだ。連赤問題總括に於ける小ブル性の克服とは、このような高原に人格的に代表されていたブンド赤軍派の主要側面としてのプロレタリア性・マルクス主義性を輝かわらせ、ブンドと赤軍派の革命的伝統を革命的マルクス主義でもつて、継承発展させることがある。自己批判されなければならないのは次のことであり、ブンド・赤軍派の当時も、そして連赤以降も階級的異分

子にも拘わらず、高原の如き分子を同伴させていたことである。この男が害毒をたれ流し、お得意の擾乱・遊泳に熱中していたのは十分知っていたが、この人物の公式な批判を自制してきたことこそ自己批判しなければならない。それ故、この自己批判のためにも、高原の脱走、離散を徹底して追及してゆくものである。

「清算主義を革命的に清算せよ！これこそが、革命的マルクス主義への道である」と我々は高原に要求すること、これが我々のこの論文の最後の結論であり、過去同志であつた同志へのせめてもの忠言である。

清算主義の残りかすを同盟内から
一掃しよう！

新清算主義のグループ（自称、マルクス・レーニン主義派）が、同盟の活動をおっぱりだして「連赤総括の第二段階||同盟再建の新たな地平を打ち固めよ!!」などといふパンフをばらまき攬乱行為を行なつてゐるが、このような行為は、敵階級や様々な日和見主義諸潮流を喜こはすだけであつて、運動の発展に少しの進歩も与えるものではない。もちろんこれまで様々な清算主義の粉碎を通して成長してきた我々にとっては、この新清算主義の登場はさしておどろくべきことでもないが、しかし、この新清算主義を粉碎することは、我が同盟内から清算主義の残りカスを一掃し、再進撃をかちとる上で、一つの大きな任務となつてゐる。ところで、毛主席は「世の中でいちばん手がかかるのは、観念論と形而上学である。なぜなら、それらは客観的実際の点検をうけることもなく、データラメをいつてもかまわないからである。唯物論と弁証法の場合は、客観的実際を根拠にし、客観的実際の点検をうけなければならぬから骨を折らなければならない。もしも骨砕されてきた代物にすぎないが。

だから、我々は清算主義の登場に対してもなんらおどろく必要はないのである。しかし、清算主義はけつしてなくなるものではない。清算主義はたえず様々な色あいをもつて登場してくる。だから、我々はこれまでの清算主義の粉碎を通して、同盟の路線を継承し、発展させてきたようになつた。たゞ登場する清算主義を粉碎する闘いを通して、同盟の路線をより一層発展させ、同盟の路線の正しさに対する確信、同盟議長塩見同志の指導の正しさに対する確信を獲得し、同盟の大進撃をかちとつていかなければならない。

（一）新清算主義の登場は同盟の前進にとつてよいことである。

形而上学を武器にして、無責任にすきかってなことをシャベリマクリ、運動の継承・発展という困難な事業に真向から反対し、全面清算しようとする。彼らは、とにかく運動の継承・発展に反対しさえすればよいのであり、より端的に言えば塩見同志の指導に反対しさえすればよいのである。従つて、清算主義者の主張はアレコレと色あいは違つても、その本質においては全く同じである。臨總派の清算主義は、連赤を赤軍派の軍事至上主義、軍事一点張り、軍事空論主義の必然的帰結という到達点論でもつて総括し、全面清算するものであつた。しかし、これは塩見同志の論叢ナンバー六によつて粉々に粉碎された。それに続いて登場した清算主義は仏派であり、仏派は、今度は赤軍派を峰起主義||玉碎主義と規定し、その必然的帰結として連赤を総括し、全面清算するものであり、やはり到達点論であつた。そして、これもまた我々の手によつて粉碎された。今度登場した新清算主義は、後に示すように、赤軍派を小ブル急進主義のテロリズムと規定しているところが、これまでの清算主義とちがうところ

観念論の形而上学の到達点論を粉碎する核心は、対立物の統一と闘争の法則をしつかりと運用することである。対立物の統一と闘争の法則は、まさに弁証法の最も基本的な法則であるが、清算主義者はこの法則を詭弁かなにかのようにも思つて、赤軍派をなんとかして清算せんとするのに他ならない。もつともそれは常に我々の手によつて何度も粉碎されてきた代物にすぎないが。

だから、我々は清算主義の登場に対してもなんらおどろく必要はないのである。しかし、清算主義はけつしてなくなるものではない。清算主義はたえず様々な色あいをもつて登場してくる。だから、我々はこれまでの清算主義の粉碎を通して、同盟の路線を継承し、発展させてきたようになつた。たゞ登場する清算主義を粉碎する闘いを通して、同盟の路線をより一層発展させ、同盟の路線の正しさに対する確信、同盟議長塩見同志の指導の正しさに対する確信をしつかりと獲得し、同盟の大進撃をかちとつていかなければならない。

（二）新清算主義の登場は同盟の前進にとつてよいことである。

清算主義の赤軍派との分裂。七一年小ブル革命主義の赤軍派とプロレタリア革命主義との分裂、連合赤軍の、反動的な小ブル革命主義と革命的なプロレタリア革命主義との分裂、連赤敗北を契機として全面化した小ブルメンシェヴィズムとプロレタリア革命主義との闘争、等々、これらの事態は、党の統一がまつたく一

時的、相対的なものであつて、むしろ、批判と闘争が長期的・絶対的なものであること。そして、この批判と闘争こそが党の発展の原動力であったことを示している。しかもそれだけではない。この党内——党派闘争——路線闘争の複雑な歴史は、それが常に階級闘争の複雑な発展という条件の党への反映に他ならないこと。階級闘争の発展という条件の変化が党を統一から批判と闘争へと不斷に転化させ、党の発展をもたらしてきたことを示している。六九年の第一次ブンドの分裂は、大衆実力闘争の昂揚の中から安保大会戦への進出という階級闘争の変化の反映であり、七一年の革命派の小ブル革命主義とプロレタリア革命主義との分裂は、安保大会戦からプロレタリア革命戦争への転換という階級闘争の変化の反映であり——もちろん、これらは根柢的には国际国内階級情勢の変化、すなわち、現代帝国主義の相対的安定期から停滞的危機への移行、世界革命戦争の防禦段階から天下大動乱の対峙段階への突入、小ブル急進勢力の後退から七〇年代革命勢力の登場の反映であり——小ブルメンシエヴィズム、仏派、革命左派、赤報派等とプロレタリア革命主義との闘争は、運動の後退の中で退却——攻勢的蜂起の準備の必要性をめぐつて現われた経済主義とテロリズム、清算主義と教条主義に対する闘争を通してのプロレタリア革命主義の指導権の確立のための闘いであり、連赤総括を通しての「反スタ・トロッキ

レタリア革命主義への止揚」による单一の前衛党建設の基盤の構築の闘いであり、現代帝国主義の危機の深化、七〇年代革命勢力の成長の反映であつた。

このように階級情勢の不断の変化は常に党内に反映し、必ずそれを条件として批判と闘争の段階が現われ、批判と闘争を原動力として党の発展がかちとられているのである。従つて、インドシナ革命戦争の勝利と極東情勢の緊張、中国社会主義の国際拠点地下、七〇年代プロレタリア革命勢力の成長等による、現代帝国主義の停滞的危機の一層の深化——資本主義の寄生性と腐朽性の一層の増大——対峙段階の一層の成熟、これに対抗する米日帝国主義、社会帝国主義の天皇制政治を中心とする反撃によって、階級情勢、階級闘争が新たな緊張関係に発展し、運動の新たな徵候が現われ始め、これに対応して新たな批判と闘争の段階に突入するには当然のことである。従つて新清算主義が、プロ革派の新たな前進の開始とともにとびだし、すでに使い古された手口を使って、ブンドー

——赤軍派の全面清算をさげびたてたところでおどろくことはなにもない。これは、まったく事物の運動法則であり、階級闘争の発展の同盟への反映である。

またこの新清算主義の日和見性は、「総括はまだ終つてい

ない」と主張して総括論争を現実の階級闘争と無関係に永遠に続けようとしていることである。もちろん総括に「もうこれまで全て終わつた」などという段階はありえず、総括は不斷にくりかえしくりかえし深められていかなければならぬ。しかし、総括の深化は実践による検証なしには不可能であり、実践ぬきの永遠の総括は永久に実践せずにスコラ論議をくり返し、「概念から概念へ、書物から書物へ」という観念論に転落することになる。このような右翼日和見主義は、アレコレと深刻ぶつた主張をおこなつて人々を惑すのであるが、このようなヤカラガ路線闘争の発展になにか貢献したといふことはできない。なぜなら、総括の核心は実践によつてかちとつた新しい感性的個別の表面的認識を理性的普遍的本質的認識へと深め、客観的真理を発見することにあるだけなく、この客観的真理を基準にして旧来の不十分な欠如をもつた路線をより正しい、より完全な路線へと変革して再実践のための政策、方針を出し、再実践によつて総括が正しく行なわれたかどうかを検証し、総括の一層の深化のための感性的材料を獲得する、というところにある。このように総括は不斷に実践によつて検証され、実践によつて深められていくのであり、階級的実践と無関係な総括論議はまったくの書斎主義であつて永久に発展することはありえない。このことは、七〇年に、階級闘争と無関係に綱領討議を続けようとした日和見主義の連合ブンドが、結局七年革命戦争から何ら学ぶことができ

ず、連合ブンドの大部分が永久に階級闘争から無縁な集団に転落してしまった事実に証明されている。我々は、「革命的理論なくしては革命的実践はありえない」(レーニン)、「思想面、政治面での路線が正しいかどうかがすべてを決定する」という観点から、無総括なまま盲目的に実践を行なおうとする素朴実践主義に反対するとともに、客観的世界を変革する能動的攻撃的実践だけが、正しい認識、正しい路線、正しい理論の基礎である、という観点から、実践ぬきに自己変革をからとろうとする右翼日和見主義、保守主義に断固として反対し、犠牲を恐れず大胆に実践の領域に進出しなければならない。このように、新清算主義との批判と闘争は、我が同盟の発展にとってむしろよいことである。なぜなら、この批判と闘争は、階級情勢、階級闘争の発展に対応した我が同盟のすべき諸任務を確固としたものとして、我々自身にたゞきこむからである。だから我々は逆に、新清算主義に対する批判と闘争を徹底化させ、彼らの清算主義を木端微塵に粉碎し、二度と足腰のたたないようにしてやらねばならない。

さて、新清算主義者は、「連赤総括の第二段階——同盟再建の新たな地平を打ち固めよ！」と題するパンフの中で、「『プロ革派』は、その総括を弁証法的に解明しえず、歴史の反映、客観情勢の把握に総括を部分化し、トータルな総括を提出しえず、又、それに規定された党的立脚点の獲得に失敗し、テロリズムを基調とする急進民主主義——経済的テロリズムたる旧来の我々の枠を突破しえずに止まつてゐる。」とか、「『プロ革派』は、ハ小ブル革命主義——からハプロレタリア革命主義——への止揚としての内実——資本主義批判の獲得（綱領草案）を以つてその総括を完了し」「連合赤軍問題の内因を一面的にしか、部分的にしか総括しえず、政治——軍事路線、組織路線の総括を放棄し」「小ブル急進民主主義のテロリズムを自己合理化し居直り始めている」等と主張し、せいいっぱいの我々に対するケチつけを行ない、我々の連赤総括に対する批判にとりかかつてゐる。

そもそも我々が、総括を「弁証法的に解明」しえなかつたかどうか、総括を「歴史の反映、客観情勢の把握に部分化した」のかどうか、「トータルな総括」を提出しえなかつたのかどうか、我々の旧来の路線は「テロリズムを基調とする急進民主主義——経済的テロリズム」であつたのかどうか、我々は総括を「資本主義批判の獲得」でもつて完了させたのかどうし、彼らの都合のよしよしに歪曲する。すなわち「プロ革派の総括の核心は、②反スターリン・トロツキズムと毛教条主義の同時相互止揚が国際・国内階級闘争の到達地平から要求され、赤軍派と革命左派はそれに挑戦したこと、⑤そのことは、両派の合同、「新党」建設として、又新たな階級闘争の質——「銃による殲滅戦」の路線を要求した。⑥その党的質の転換に向け、連赤——「新党」はハ小ブル革命主義——を徹底化・止揚し、ハプロレタリア革命主義——へ飛躍すべく思想——作風問題を組織したが、指導部が反動化し敗北した。の三点である。我々が問題にしなければならないことは、②の目的のために⑤を媒介にして⑥の手段がとられたことである。」といつたい我々の総括をこのように要約できるであろうか？

このようない要約は明らかに、我々の総括の核心を徹底して修正してしまうものである。なぜなら第一に、これではあたかも新党志向が現実の階級闘争と無関係に形成され、その志向のもとに「銃による殲滅戦」の路線が確立されたかのようであるからであり、第二に、思想・綱領をめぐる路線問題の同一表現として我々が解明し、運動の継承・発展を鮮明にした「反スターリン・トロツキズムと毛教条主義の同時相互止揚」と「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への飛躍」とがまるで別々のことであるかのよう示されているからである。もちろんこのような企画を彼らが行うのは、彼らに特別の腹黒い目的があるからである。それは、「新党」志向がどのように

うか、「政治——軍事路線、組織路線の総括」を放棄したのかどうか、これらについては、これまでの総括論争を知つてゐる読者ならば、ただちにこの新清算主義の批判がまったくのデタラメであることがわかるであろう。このことは、彼らが連赤総括論争に主体的にとりくもうとせず、官僚的に居直り、一線を画し、幹部風をふかせ——新清算主義グループが主として古くさい、骨董品化はじめた旧幹部によつて占められている事実に注目せよ！もちろん我々は彼らが赤軍派創立当时にはたした偉大な革命的役割をわざるつもりはない。しかし、階級闘争の發展とともに積極的、能動的に自己変革をおしすすめようとしなければ、いづれはかびがはえ腐つてくるということはどんな場合にもあつてはまる。我々が常に新鮮で、革命的で、若々しく生氣はつらつとした共産主義者でありつづけたいと思つたならば一生革命を行ない、一生自己変革を行なわなければならない。——プロ革派の作風・規律にそまらない自己の「独自性」を維持しようとして、運動の發展からとりのこされてしまつたことを示している。彼らは、もうとにかくブント——赤軍派を全面清算し、逃亡することを正当化しさえすればよいわけであるから、ブント——赤軍派の闘争史を階級闘争との関連の中でとりあげて具体的に分析し、運動の継承・發展をかちとつていく等という志向などさらさらなく、すきかつてなたわ言を無責任にしゃべりまくつている。彼らはまず我々の総括を次のように要約する。

な階級情況の中で、どのような運動を媒介にして形成されたのか、どうう我々の総括の第一の核心に目をつぶり、「新党」志向を突然形成された連赤の主觀的な願望かなにかのように言いくるめることによつて、新たな階級闘争の質を示す「銃による殲滅戦」を階級闘争と無関係なテロリズムと規定し、「反スターリン・トロツキズムと毛教条主義の同時相互止揚」から切り離し、「テロリズムからは何も生まれない」とうそぶいて清算し、運動の継承・發展に真向から反対せんとするものである。

このようない腹黒い陰謀をもつて彼らは、我々の総括の核心を根本的に歪曲し、骨ぬきにした上で、やつと安心して次のように断言するのである。「『プロ革派』の総括は、⑤の内的総括を不間に付すことにより、「新党」指導部の反動化さえなければ、連赤——「新党」の路線は正しかつたということを結論づけている。……『プロ革派』は、小ブル急進主義のテロリズムたる連赤——「新党」の路線を根本的に切開せず、不問に付し、我々の階級的責任をあいまいにして、小ブル革命主義の反動化と「新党指導部」の責任に内因を軽化し居直りであり、誤りである」と。つまり、彼らによれば、我々プロ革派は、連赤の「銃による殲滅戦」を不間に付し、責任を「新党指導部」の反動化に軽化して居直つてゐる、と

いうのである。これで、新清算主義者諸君の正体がだいぶ鮮明になつてきただが、我々が「銃による殲滅戦」を不間に付しているかどうか、責任を「新党指導部」の反動化に転化しておるかどうかと、いふことはいずれわかることであり、ともあれ、まず、彼らの「銃による 滅戦」の総括を聞いてみよう。

〈三〉使い古された連赤清算の手口

どの清算主義者も森君の遺言を、本人がいないことをいいことにさかんに悪用し、すきかつてな解釈によつて清算攻撃を行なうが、この新清算主義者もその例にもれず、彼らは森君の遺言を都合よく解釈したあとで、「六・一七鬭争とその後の闘いのいきすまりに對して、同盟は第三次綱領論争を組織したが路線的解決をしえず逆に」「戦術主義を鈍化し、情勢の急速な煮つまりと、大衆の自然発生性に押殺し」「戦争を荷う『人の要素』を路線の主要な側面に据え、『銃と人』の思想問題、『銃による殲滅戦』の戦術を路線的核心に据え」「困難な局面を從来の我々の発想に従つて、すなわち軍事のエスカレートによつて突破しようとして」「テロリズム」と純化していく」として「銃による殲滅戦」を総括し、ここから「赤軍派——連赤の主要側面は非マルクス主義のテロリズムであった。このハブンド主義▽赤軍主義▽すなわち、戦術主義▽自然発生性への押殺の極限化の敗北が連赤——」の歴史化であった。それ故、非マルクス主義のテロリズムを主要側面とする旧來の同盟の路線、連赤——『新党』

の路線との闘争、批判を通してしか、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得しえない」と結論をひき出している。つまり、彼らの主張せんとするところは、連赤清算はブンド——赤軍派の小ブル急進主義のテロリズムの極限化による必然的帰結である。といふ観念論の形而上学の到達点論に他ならず、これが、彼らの言うところの「対象の科学的な分析—総合の弁証法」なのである。こうして彼らは、テロリズムに純化した旧來の同盟の路線を清算しないかぎり、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得しない、という結論のもとに、「ブンド主義、赤軍主義」清算を声高にさけびたて、ブンド——赤軍派の全面清算の道を切り開くのである。もちろん、このような使い古された到達点論がまだ通用するのではないかと思つたらおまちがいであり、臨總派や仏派の到達点論を粉碎してきた我々にはもはや通用しないことである。それにもかかわらず彼らが、この到達点論をもちだしてきたことは、彼らがこれまでの連赤総括論争——路線闘争に真陥にかかわろうとせず、外野席からヤジ通り開くのである。それにかかわらず彼らが、この到達点論をもちだしてきたことは、彼らがこれまでの連赤総括論争を声高に暴露するものであり、このような党建設における無責任な態度、官僚主義、解党主義は徹底して糾弾されなければならない。

このような無責任の產物である到達点論にもとづいた彼らの我々の総括への攻撃は、徹底して反動的なものであり、完全な非マルクス主義であり、まったく惡意と中傷にみちたものである。彼らはまず、「非マルクス主義の急進主義のテロリズムを基調とする旧路線の下では、テロリズムへの純化はあつても止揚しきれない」といつて、同盟を対立物の統一と闘争の法則の觀点から分析することに真向から反対し、つづいて、「ところが『プロ革派』は、十二名のプロレタリア革命派の同志達の復権を軸とする『再新党志向』でもつて、『新党』路線は正しかつたと総括し、居直つてゐる」とか、「『プロ革派』の『十二名の立場』とは『新党』の立場のことであり、「十二名のプロレタリア革命派」の復権とは実は、『新党』の復権のことなのである」等と主張して、我々の『十二名の立場』論を徹底して歪曲し、さらに「十二名は……」の十二名の闘いを復権した総括に対して十二名が「内乱と革命戦争を全てを犠牲にして追求した部分です」（草案）といふ我々の十二名の闘いを復権した総括に對して十二名が「内乱と革命戦争を追求した部分」ではないかのようにい、プロ革派は十二名の立場を利用して「新党の路線——小ブル急進主義のテロリズムを擁護・復権してゐる」とか、「十二名を誤つた路線の體現者としてプロ革派は復権しようとしている」等と中傷し、この「小ブル急進主義のテロリズムを基調とする赤軍派の路線」の清算の中からしか「十二名の同志達の復権はなし得ない」と主張するのである。つまり彼らによれば、我

ところでここで思ひおこされるのは、「資本主義批判は総括の軸となりえない」とか、「プロ革派の総括は森同志突如反動化論だ」とか、「十二名の立場には納得できない」とか、「蜂起主義＝玉砕主義の総括がない」等々といつて一年以上もさわぎまわり、プロ革派の登場にやつきとなつて反対した仏派の清算主義である。すなわち、この新清算主義の全面清算攻撃は仏派のそれとなんら変わりない、ということであり、ちがつていることは「十二名の立場」を否定するのではなくて、彼ら流にデッヂ上げているということである。

〈四〉『ブンド主義・赤軍主義』を断固として堅持しよう！

さて、「銃による殲滅戦」がはたしてテロリズムであったかどうか、という問題から解決していく。とはいえる。この問題は、既に塙見論叢や仏派の「蜂起」（五八号）批判（『赤軍』三・四合併号）の中において基本的に明らかにしてある。

すなわち、七一年の二・一七闘争・連続M闘争に続く六・一七闘争の勝利は、反動的な小ブルー稳健主義の経済主義・合法主義・一国主義を解体すると共に、プロレタリア革命戦争勢力の流動化をもたらし、七一年秋期闘争の昂揚、安保大会戦からプロレタリア革命戦争への転換の道を切り開いた。そして、七一年秋期の秋期闘争の昂揚、沖縄闘争の昂揚は、ブ

独根拠地に立脚することができず、そのため、「銃による殲滅戦」は挫折することになつただけでなく、不斷に唯銃・唯軍主義の傾向に流されることになつたのである。何故なら、「銃を軸とした滅戦」は、党建設を基軸としたプロ独運動・建軍ソヴィエト運動の根拠地建設によってのみ可能だからである。このように、党建設を基軸とするプロ独根拠地建設に立脚しきれなかつたとはいえ、「銃による殲滅戦」をテロリズムと規定することは重大な誤まりであり、無知もはなはだし。このような誤まりは、新清算主義が「銃による殲滅戦」を当時の階級情勢の分析の中で評価せず、全面的な連関を無視して孤立的——一面的に評価していること、そしてさらには、テロリズムと革命戦争との区別ができることに原因がある。例えは、この新清算主義の頭目たる高原君は、テロリズムについて「小ブルーインテリである学生が武装闘争の衝撃で、労働者階級を決起させる路線」とか「労働者階級に対する政治的宣伝・煽動・組織化の遂行を放棄した武装闘争路線」というおきまりの文句で規定しているが、このような規定は党建設の環を見出さんと必死に闘つてきた赤軍派にあてはまらないばかりか、現代のテロリズムを不明確にするだけである。もちろん、当時、高原がそういう路線でもつて赤軍派を指導していたというのならば自己批判すべきであるが、だからといってそれを赤軍派に全面化し、赤軍派を清算し、聖人君子たらんとするならば、それは、まさに「責任転嫁の

ロレタリア階級の軍隊とブルジョア階級の軍隊との勝敗を決定する決戦、すなわち、正規的権力闘争を要求した。というのは、大衆運動の昂揚があるだけではブルジョア国家権力の運動の昂揚は、ブルジョア国家権力との勝敗を決定する可能性をもつてゐるが、それはまだ勝敗の現実性になつておらず、この勝敗の実現はプロレタリア階級の軍隊とブルジョア階級の軍隊との決戦にかかつてゐるのである。

しかも、「正規的革命戦争へと前進しきれず、根拠地のない無後方の状態でも可能な、かつ革命主体の思想性・政治性・組織性の共産主義化を本質的に要求しない爆弾闘争」が連続化し、階級攻防の緊張を高める中で、無政府主義的テロリズム的傾向へと後退していく中で、テロリズム批判として、白兵戦＝殲滅戦、とりわけ、「銃を軸とした殲滅戦」をますます深刻に要求することになった。

だから、こうした階級状勢の中で、「銃を軸とした殲滅戦」を断固として提起し、正規的革命戦争によるブルジョア軍隊との勝敗の決着を追求し、革命戦争を完全に否定する経済主義・合法主義、あるいは、正規的革命戦争の困難さから後退するテロリズムを実践的に批判せんとしたことは全く正しいことであつた。だが連合赤軍は、七・一五「統一赤軍」結成の失敗に見られるように、党建設の核心を把握しきれなかつた。それゆえ、プロ独運動を組織する組織戦に失敗し、プロリズムと一諸くたにして清算せんとするのである。

我々が第二ブンド——赤軍派以来重視してきた戦術は、「困難な局面を軍事のエスカレートによって突破しようとする戦術」を基軸とするプロ独運動を放棄した文字通りの軍事一点張りの無政府主義であり、正規的権力闘争による階級闘争の昂揚の社会革命への転化に徹底して敵対する没主的の非政治的武装闘争である。だから階級闘争の昂揚に正規的権力闘争を意識的に持ち込むことは断固として正しい。ところが新清算主義者は、このような我々の重視する正規的革命戦争とテロリズムと一諸くたにして清算せんとするのである。

居直り」「自己合理化」である。現代テロリズムとは、党建設を基軸とするプロ独運動を放棄した文字通りの軍事一点張りの無政府主義であり、正規的権力闘争による階級闘争の昂揚の社会革命への転化に徹底して敵対する没主的の非政治的武装闘争である。だから階級闘争の昂揚に正規的権力闘争を意識的に持ち込むことは断固として正しい。ところが新清算主義者は、このような我々の重視する正規的革命戦争とテロリズムと一諸くたにして清算せんとするのである。

我々が第二ブンド——赤軍派以来重視してきた戦術は、「困難な局面を軍事のエスカレートによって突破しようとする戦術」を結合させ、大衆運動を社会革命に転化させる、といふ徹底してマルクス・レーニン主義的な戦術であった（『赤軍パンフ16』を見よ！）。従つて、この「ブンド主義」「赤軍主義」は清算されはならない。むしろ、逆にプロレタリア革命主義としてより一層徹底化させ、運動の昂揚・衰退とは無関係に戦術を決定しようとする主觀主義・冒險主義、あるいは仏派や高原のように「グリラから開始する」などといつて「單一党建設を基軸とする建軍ソヴィエト運動と正規的権力闘争」を否定する無政府主義・テロリズムを断固として排除し、清算止揚しなければならない。こうしてのみ、我々は、運動の新たな昂揚を社会革命へと転化させるための正規的権力闘争＝攻撃的蜂起に前進できるのである。だから新清算主義が「ブン

ド主義」「赤軍主義」の清算をワメキたてて反プロ革の攪乱行為を行なうとき、それが、運動の新たな昂揚とともに要求されている赤軍派の進攻||プロレタリア革命戦争の開始からの逃亡を意味することがはつきりしてくるのである。

このように、我々は「銃による殲滅戦」の意義と限界を七年革命の階級情勢との全面的連関の中ではつきりと総括し、その中から、現代テロリズムに対する規定を鮮明にさせ、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想の戦術原則をしつかりと獲得しているのである。だから、新清算主義者の「『プロ革派』の総括は『銃による殲滅戦』を不間に付している」「赤軍派の路線は非マルクス主義の小ブル急進主義のテロリズムである」というケチツケは、全くデタラメなタワ言であり、赤軍派からの脱走のための口実作りに他ならないのである。

〈五〉我々の総括の核心

ところで、我々の「銃による殲滅戦」の総括はそれだけにとどまらない。

すなわち、六〇年代後半から昂揚した運動は、学生・青年労働者・知識人を中心とする小ブル急進民主主義運動であった。そのため、それに「プロンド主義」・「赤軍主義」、すなわち前衛部隊の正規的権力闘争が結合され、安保大会戦からプロレタリア革命戦争への転換が要求されるとともに小ブル急進運動は後退・衰退し、特に大・一七闘争を契機にして急速に解体していった。このことは連合赤軍に対して、小ブル自身にするどくつきつけるわけであるが、このことによつて連赤——「新党」は「一がわかれで二となり」、観念論の形而上学・天才論の孔孟の道・「エゴイズム」の克服でもつて「共産主義化」をおしすすめようとした「新党」指導部派は反動化し、路線転換の諸課題をことごとく挫折せしめ、单一党建設を私党建設に変質せしめ、この指導部派の反動化に抗して形成され、唯物論の「共産主義化」でもつて諸課題を解決しようとした「プロレタリア革命主義」の諸同志を、孔孟の道に照應した「思想闘争」・「整風運動」によって肅清していくのである。

以上が我々の総括である。だから明らかに新清算主義がいふ我々の総括の要約は完全に誤まっている。つまり、新党志向のもとに「銃による殲滅戦」の路線が生れて肅清へと至つたのではなく、「銃による殲滅戦」の路線のもとに新党志向が生れ、この新党志向が思想問題を契機に「一がわかれで二となり」肅清に至つたのである。すなわち、我々の総括の核心は、②「国際——国内階級闘争の到達地平」は「新たな階級闘争の質」、すなわち「单一党建設を基軸とするプロ独運動と銃による殲滅戦」の路線を革命的左翼に要求したこと。

⑤このことは、旧来の路線の転換としての綱領——作風・規律の正しい解決、すなわち思想問題||「共産主義化」を基礎とする「反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止揚」、「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への飛

ル急進運動に立脚した正規的権力闘争から七〇年代革命勢力のプロ独運動に立脚した正規的権力闘争へと、路線を転換することを要求した。とりわけ七一年秋期の「銃による殲滅戦」の挫折は、この路線転換の根本的解決ぬきには連合赤軍の一歩の前進もあらえないと示した。

この路線転換は第三次綱領論争として組織されつつあったが、これは「党建設を軸とするプロ独運動」を組織する組織戦のための綱領——作風・規律の正しい解決によつてのみ可能であり、それがまさに思想問題||「共産主義化」を基礎とする「反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義からプロレタリア革命主義への飛躍」による单一党建設にほかならなかつた。というのは、第一に、赤軍派と革命左派の両派の路線は、それぞれ六〇年代の相対的安定期における階級闘争を反映した二大潮流すなわち反スタ・トロッキズムと毛沢東教条派の中から生れた前衛部隊でありながら、反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義の小ブル日和見主義を止揚しきれていたよつたからであり、第二に、世界史的階級闘争の諸法則を解明した一向過渡期世界論にとつても「党建設を基軸としたプロ独運動と攻撃的蜂起」の分野は未解明のまま残されていたように、当時の革命的左翼は革命的ではあつたが小ブル革命主義にとどまり、プロレタリア革命主義と未分化の状態にあつたからである。これらのことは、当然、どのような思想路線の下でこれらの諸課題を解決していくのか、ということを連

躍」を要求したこと。

⑥「赤軍派・革命左派はそれに挑戦し」、「党的質の転換」||路線転換に向けて「思想——作風問題」||「共産主義化」を組織し、「新党」を建設したが、「共産主義化」をめぐつて「新党」は「一がわかれで二となり」、「指導部派が反動化して敗北した」こと。ということである。だから彼ら新清算主義者のいう我々の総括の要約は、我々の総括をさかさまにしたものなのである。

だから、我々は指導部派に責任を転嫁してはいない。我々はあくまで旧来の路線の不十分性、とりわけ「共産主義化」||思想問題について真剣にとりくまず、したがつて君たちのような非マルクス主義思想に対する闘いを重視してこなかつたこと、を痛苦をもつて自己批判するものであるが、だからといって、我々は旧来の路線の全面清算に応じるほどお人好しではないし、それは誤りである。なぜなら、重要なことは、七一年革命の中で問われた課題の解決を通して旧来の路線を変革し、一二名の同志たちの闘いを継承・発展させることであるからである。

ところがどの清算主義者も常に、この七一年革命の中でわれ、一二名の同志たちがもともと真剣にとりくもうとした課題を分析し解決するといふことには、関心さえ示そうとせず清算するのである。ここに彼らの一二名の同志たちに敵対する非マルクス主義としての本質がある。同盟の路線を「小

ブル急進主義のテロリズム」と規定し清算するところからは何も生れてこないどころか、一二名の同志たちの立場に立つことすらできない。

また、新清算主義者は、「『プロ革派』の総括は、『プロ独の規律——整風運動』を『新党』指導部が反動化させなかつたら正しかつた。すなわち、連赤——『新党』の路線は正しかつたが、指導部が思想問題を解決しえず反動化したこと、連赤敗北の原因があつたと言うのである」と言つてたくみに問題のシリカエをやつてゐるが、まず第一に、我々がどこで「新党」の路線は正しかつたなどといつてゐるのかね？こういふデタラメは君達の無知を示すだけである。重要なことは、七一年革命で直面した路線転換のための諸課題を解決せんとした連合赤軍の新党志向を支持するのかどうか、である。そして我々はこれを支持し、君達はこれに反対し清算しているのだ。しかしこの新党志向は「共産主義化」をめぐつて、それにマルクス・レーニン主義の原則綱領、すなわち弁証法的唯物論、史的唯物論、資本主義批判、科学的共産主義論でもつて答えきれず「孔孟の道」を代行させた指導部派の「新党」と、これに反対し、指導部派の綱領論争を否定する独断専行に反対し、唯物論的な「共産主義化」のもとに「新党」を建設することを要求した一二名の「新党」とに別れたのである。だから我々は、一二名の「新党」の闘いを断固として継承し、唯物論的な「共産主義化」を軸に発展さ

つて主張しているのであるが、はたして、一二名の同志は「銃による殲滅戦」に反対し、赤軍派の全面清算を主張していくであろうか？断じて否である。もし、一二名の同志達が「銃による殲滅戦」に反対していたのであれば、第一に、どうして赤軍派の殺された同志達は、「銃による殲滅戦」に対する民兵主義派を批判して共同軍事訓練に参加したのであらうか？新清算主義者はこうした問題には何も語ろうとしないのである。このことは、彼等こそが一二名の同志達の闘いを自分達の都合のよいようにデタラメあげ、結局一二名の闘いを否定して全面清算せんとしていることを示してゐる。つまり、彼らこそ一二名の闘いの利用主義者に他ならず、彼らは自己の破産を、一二名を利用して隠蔽し、延命をはからんとしているのである。こういう一二名の闘いを無視したデタラメな主張は、まさに、死者がないことをいいことにして革命派攻撃を行なう検察官の主張と同じ類のものであり、断固として粉碎しなければならない。

一二名の闘いを分析する場合、我々は、七一年秋期における階級情勢を反映した一二名の党内——党派闘争から明らかにならなければならぬ。すなわち、一二名の同志達は、第一に、連赤指導部の小ブル革命主義の唯銃唯軍主義に反発する

せ、单一党建設の道を確立する。そして君達はこれに反対し、指導部派の「新党」もいつしょくたにして清算し、一二名の同志の闘いに敵対してゐるのだ。

従つて我々は「新党」指導部派が反動化しなかつたら正しかつたと断言する。なぜなら、指導部派が反動化しなかつたならば、それは思想問題を正しく解決し、旧来の路線の不充分性を変革し、新党志向を路線化させたことを意味するからである。このように、清算主義者が、赤軍派——連赤——「新党」をテロリズムと規定して清算せんとすればするほど、ますます一二名の同志の闘いから遠去かり敵対していくことになるのである。

（六）新清算主義者は一二名の闘いを否定する、我々は一二名の闘いを継承・発展させる。

新清算主義者は、一二名の同志は「銃による殲滅戦」そのものに反対した、と一二名の同志の闘いをデッチあげ、「孔孟の道に反対した」等といるのは、指導部の反動化だけに原因を求めて階級的責任を回避するものだ、だから「プロ革派」の総括は、「一二名の立場」を利用して「新党」の路線。「銃による殲滅戦」を擁護し、「小ブル急進主義のテロリズムを基調とする旧來の同盟の路線」を復権させるものだ等とスキかつてなデマをとばし、一二名の闘いを具体的に分析しようともせずに、赤軍派の全面清算を「一二名の立場」に立

あまり、「銃による殲滅戦」をも清算しようとした赤軍派の民兵主義、及び、反愛教条にしがみつき、反愛教条の止揚を要求する「銃による殲滅戦」を否定する獄中革左の毛教条主義、あるいはまた、党建設を基軸とする組織戦の困難さ故にこれを否定し、小ブル戦闘団主義にとじこもる無政府主義的な小ブルグリラ主義に断固として反対し、「銃による殲滅戦」を堅持するとともに、第二に、「銃による殲滅戦」の挫折等によつて破産し反動化しつつあつた連赤指導部の小ブル革命主義、すなわち、赤軍派指導部の組織戦に対する無方針や、客観的諸情況を無視する主觀主義、さらに「孔孟の道」による父長的な封建的主従関係の強化による党的指導の欠如の補強、及び、革命左派指導部の組織戦の敗北を山岳でもつて解決しようとする山岳根拠地主義や、客観的諸情況を無視する主觀主義、さらに、党的指導の欠如を補強する山岳根拠地防衛のための観念的な整風運動、等に反対し、「党建設を基軸とした、プロ独運動と銃による殲滅戦」のための綱領・根拠地問題、作風・規律問題の正しい解決||第三次綱領論争を要求し、プロレタリア革命主義への道を必然化させていた。そして、一二名の同志の小ブル革命主義との闘いが、共同軍事訓練における綱領||根拠地問題、作風・規律問題からより一層根底的な思想問題（「共産主義化」）をめぐつて公然化し、一二名の同志は、一方では、軍の攻撃性・組織性・計画性の欠如と称して、組織戦に基礎をおくマルクス主義的戦術

を全面清算し、他方では、「共産主義化」に「孔孟之道」をゴリ押しして、家父長的奴隸制を徹底させ、一二名の同志を「問題がある」、「共産主義化できていない」、「おくれてゐる」と称して排外化し、じゃものあつかいしようとする指導部派に對して困難な苦闘を行なつたのである。言いかえれば、一二名の同志こそ「内乱と革命戦争」のために、とりわけプロレタリア革命戦争を指導する「單一党建設」のために、もっとも「共産主義化」を望み、思想問題、綱領、根拠地問題、作風・規律問題の正しい解決を要求していたのである。ところは、一二名の同志は、すでに、「プロ独運動と銃による殲滅戦」が正しい路線なしには不可能であることを十分に知つたからである。しかし、これに対しても指導部派は、第三次綱領論争をおっぽり出し、一二名の同志の自己犠牲にみちた献身性、革命的英雄主義、革命戦士として生きぬかんとする攻撃精神につけいつて次々と肅清を遂行し、新党建設を私党建設に変質させ、正しい路線のもとでのみ可能な党建設を基軸とするプロレタリア独裁運動を、山岳根拠地主義の自己権力運動、ブルジョア独裁運動に転化させ、結局、「共産主義化」をかかげながら「共産主義化」に真向から敵対していったのである。だから、我々は、一二名の同志の闘いをデッチあげて利用しているのでは断じてない。連合赤軍が七一年革命の直面した根本的な諸課題を、思想問題の解決、プロレタリア思想路線の獲得を基礎にして正しく解決

批判の獲得でもつて総括を完了している」等とデマをとばしても、だれも信用しないのである。むしろ、我々としては「塩見同志のこの二年にわたる苦闘の間に君達は何をしていたのかね」と彼等に質問してみなければならない。そうすれば、彼等が一二名の同志の闘いを否定し続けてきたことがはつきりとするであろう。

〈七〉「新党」指導部派の思想的・政治的支柱、十二名の肅清の黒幕は高原君である。

以上のように、一二名の同志の闘いの分析は、一二名の同志の立場に誠心誠意立つことがいかに困難なものであるか、いかえれば、一二名の同志の闘いがいかに困難にみちたものであつたか、どうことをはつきりとさせる。だから「一二名の同志の立場に立つ」ということは、けつして軽々しく口にしてはならないものである。従つて、一二名の同志の闘いは、七一年革命の中で、革命派が直面した諸課題に答えきれずに逃亡していくものや、逆に、一二名の同志の闘いに敵対していくものに、根底的な自己批判を要求するのである。ところが新清算主義者は、こうどうことについては沈黙をきめこむのである。新清算主義者の諸君、とりわけ高原君がこの自己批判に答えきれず、一部遺族としての地位にしがみつき、一二名の闘いを自分勝手にデッチあげて、一二名の同志のとりくんだ諸課題を全面清算し、責任回避し、居

すること、このことが一二名の同志の苦闘を全力をあげて支持し、継承・発展させることと完全に一致しているのである。そして、これこそが我々の「一二名の立場」論なのである。従つて、一二名の闘いの継承・発展とは、「非マルクス主義のテロリズムを主要側面とする旧来の同盟の路線との闘争、批判」などといふタワケたことではなく、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想のもとに「反スタ・トロツキズムと毛澤東主義の同時相互止揚」、「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への飛躍」をかちとり、綱領、根拠地問題、作風・規律問題を正しく解決し、プロレタリア革命主義の組織・陣型、戦術を確立することに他ならないのである。そして、このことはとりもなおさず、思想問題のあいまいさ故に、資本主義批判を基礎にして再構築し、革命の性格や過渡期を含めた階級・階層政策、社会主義革命戦争の政治・軍事法則、階級形成、党建設一元論、プロレタリア的作風・規律を正しく解決していくことに他ならず、それがまさに高原批判に始まり、反スタ・トロツキズムの小ブル革命主義批判、日共革命左派（神）批判、赤報派批判、臨總派批判、日本委員会批判を通して、第一次綱領草案に至つた塩見同志の英雄的な闘いであった。だから、新清算主義が、仏派の口まねをして「資本主義の側面を批判しつつも、それを克服する環が見出せず、逆にその小ブル性でもつて過渡期世界論を清算して受動的な蜂起主義に後退しようとするメンシェビキ的傾向であり、この傾向は、赤軍派内の民兵主義の思想的・政治的支柱となつていた。第二の傾向は、一向過渡期世界論の限界の表出をとらえて、これを小ブル革命主義の側面から清算し、塩見同志破產論をありまき、ブルジョア的野心をふくらませ、「マルクス・経済闘争、レーニン・政治闘争、毛沢東・軍事闘争」という社会革命主義をもちこまんとした小ブル革命主義の傾向であり、この傾向は、外の指導部派の小ブル革命主義に不斷に大きな影響を与えていた。第三の傾向は、一向過渡期世界論の限界を、七一年革命の中で生起してきた新たな諸課題の解決でもつて克服しようとして、組織戦の敗北を固定化する連赤指導部の戦闘主義化や、あるいは、唯銃・唯軍主義的傾向に反発するあまり、これを清算する民兵主義的傾向を批判し、さらに、革左獄中指導部の反愛教条との論争を通して、

反スタ・トロツキズムの一挙的社会主義革命論や毛教条主義の民民革命論を止揚せんとした、反帝・反米の過渡的綱領でもつて組織戦の課題に答えていこうとしたプロレタリア革命主義の傾向であり、この塩見同志を中心とする傾向こそ、遠山同志等、一二名の同志の思想的・政治的支柱となつた傾向であった。（だからこそ、板東同志の報告でもあきらかなるうに、獄外指導部は塩見同志の当時の論文をぎりつぶし、大衆的討議を「分派活動禁止」でもつて抑圧していったのである）。そして、「新党」指導部派の思想的・政治的支柱、一二名の同志肅清の黒まくとなつた第二の傾向こそ、まさに高原君であった。高原君の社会革命主義こそ、「新党」指導部派の山岳社会革命主義の自己権力運動の思想的・政治的支柱であった。だから、以上のような獄中指導部の分化は、連赤敗北を契機として公然化するとともに、「新党」指導部派と路線的に一致し、一二名の同志に敵対していいた小ブル革命主義の部分は、責任回避にやつきとなり、塩見同志への批判の集中でもつてなんとかして自己の破産と責任を隠ペイせんとしたのである。そして、彼らは、一向過渡期世界論の限界に一切の原因をもとめたり、高原君のように、遠山同志と対立していく事実をひたかくにして——高原君は、遠山同志が君の何に対して批判し、闘争せんとしていたのか考えたことがあるのかね——遺族という非政治的地位を悪用し、路線ぬきの超階級的「一二名の立場」論をもちこんで、報復主義彼等の暗躍する余地がなくなつてくるやいなや不可能となつてきた。たしかにこのことは、彼等に對して、プロ革派の総括||路線を支持するのか否か、プロ的作風・規律を承認するのか否か、自己の古くさいブルジョア・小ブルジョア思想を克服するのか否か、をつきつけていくことになつたわけであるが、ブルジョア的野心を捨てなかつた彼らは、同盟をのつとることができないとみるや、総括等といふめんどくさいことをやめ、一転して清算主義に走り、脱走兵となつたのである。だから、彼らの脱走は、彼らにこそ連赤肅清の責任があるというふうことを示している。我々はこの点を徹底して追求していかなければならぬ。なぜなら、彼らの清算主義は、一二名の同志の闘い、——プロ革派の闘いに徹底して敵対するものだからである。そして、このことはとりもなおさず、連赤敗北以降登場した清算主義の残りかすを、我が同盟内から一掃していくことに他ならないのである。

以上のように、新清算主義の連赤総括は、赤軍派の路線を小ブル急進主義のテロリズムときめつけ、このテロリズムの極限化の必然的結果として肅清があった、といふ観念論の形而上学の到達点論であり、この到達点論によつて、新清算主義は、大衆運動の昂揚に前衛部隊の進攻を結合させ、大衆運動の昂揚を社会革命に転化させる赤軍派のマルクス・レーニン主義的戦術を清算し、「小ブル急進運動に立脚した正規的権力闘争」から「党建設を基軸とするプロ独運動に立脚した

II 檢察官の立場に走り、芝居じみた激情で「新党」指導部派をやつきとなつて攻撃し、排外的言辞で誹謗中傷し、精神的奴隸化攻撃を行なつたりして、アリバイ工作に終始するみに争に反対し、妨害を加え、中央集権的な鐵の規律、マルクス・レーニン主義のプロレタリア的規律を無視して党内秩序を無政府化させ、山頭主義・分権主義を育て、自己を腐敗・堕落させていったのである。だから、彼らは、七一年革命——一二名の闘いから何一つ学ぶことができず、むしろそれを徹入られるわけがない。だから、彼らは同盟のプロレタリア的な作風・規律をけむたがり、きゆうくつに思い、何度も組織規律を無視する行為を行ない、同盟の統制に対しても、「連赤と同じだ」とわめきてて反党行為を正当化してきた。こうした反プロ的行為は、清算主義や教条主義、経済主義やテロリズムの日和見主義の勢力が強く、党的プロレタリア的な作風・規律がまだ十分でなかつたこれまでの段階にあっては、まだ一定程度可能であつたが、彼らが責任回避のための総括デッチあげに苦心慘胆している間に、プロ革派の総括||路線が基本的に勝利をおさめ、プロ的作風・規律が強化され、

H J 戦争に敵対する上原の清算主義に革命的鉄槌を下せ！『不死鳥作戦（よど号ハイジヤック闘争公判中間総括と報告）』批判

判闘争だけではなく、誤りが露呈してゐる赤軍派の『M作戦』や『連合赤軍』の公判闘争にも共通する内容をもつてゐる」などと、「善意」の押し売りを行ない、他の同志を転向・屈服の泥沼に引きずり込もうとしているのである。

勿論、我々は、こういふ「善意」に対し、無視することなく答えていかなければならない。そして、それに答えていく為に、それ相応の「善意」を我々も用意しなければならない。しかし、我々の「善意」は、ブルジョア供の反革命攻撃に迎合し、階級闘争を放棄させようとする「善意」とは全く異つており、断固たる批判とプロレタリア的統制という革命的鐵槌の「善意」である。そして、こういふ「善意」だけが、「地獄への道」を用意した上原の「善意」に答えていくことができるといふものだ!

転向・屈服する者は、常にもつともらし的理由を持ち込んで「美化し、合理化し居直る」ものであるが、上原もその例にもれず、彼は次の様に主張して、實に巧みに転向・屈服を革命的なものに見せかけてゐる。すなわち、「H・Jの誤つていた側面を自己批判せずに無視し、単純に九人の同志達の闘いを美化し、合理化し、居直るならば、我々は検察官の反革命的陰謀の思うツボにはまつてしまふことになる。(何故なら)、検察官は、日帝の朝鮮に対する植民地支配を擁護し、陰蔽する為に、よど号H・Jが日本革命における革命戦争の實際であり朝鮮人民との連帶の実際であると規定し、よど号H・Jの誤

こういふ「善意」が、プロレタリア階級闘争に巨大な害を与えることは余りにも明らかであり、事実、上原は、このパンフの中で、「このことは、よど号H・Jの公

つていた側面を利用して、日本革命における革命戦争、朝鮮人民との連帶そのものを批判し、否定し、抹殺することに最大のポイントを置いてゐる(からである)。それが『強盜致傷』という起訴罪名である」と。

全くバカバカしくなる程、よさけた主張であるが、これは結局、H・J闘争を断固として支持し、その革命的意義を断固として防衛することは、H・J闘争を革命戦争と朝鮮人民との連帶を攻撃する「検察官の反革命的陰謀の思うツボ」にはまつてしまひ、不利となるからやめよう、といふまさに敗北主義そのものであり、公判闘争における階級闘争の完全な放棄に他ならない。こういふ主張が被告の側からとび出してこようとは、検察官も思いもよらなかつたであろう。検察官がH・J闘争を、「日本革命に於ける革命戦争の實際であり、朝鮮人民との連帶の實際である」と規定するわけがない。検察官にとつては、H・J闘争が誤つて、いようがいまいが、そんなことはどうでもよいのである。検察官にとって重要なことは、H・J闘争の日本・朝鮮を結ぶ革命戦争としての政治的・階級的意義をブルジョア的立場観点から徹底して批判し、否定し、抹殺し、「日本革命における革命戦争朝鮮人民との連帶」と共に犯罪として処理し、非合法化させ、あるいは、上原や高原の様な転向者を生み出させ、二度とH・J闘争が起らぬないようにするために「最大のポイント」を置いてゐるのであり、それが『強盜致傷』という起訴罪名なので

ある」。しかも罪名だけではH・J闘争を粉碎しきれないが故に、ブルジョア供は、更に、「航空機の強取等の処罰に関する法律」を革命派の為に作つてくれたのである。ところが上原は、このブルジョア供の反革命攻撃に連帯し、自ら進んでH・J闘争の政治的・階級的意義を清算し、自己批判し、あるいは、堀越氏のH・J闘争を否定し、アラブの同志達に敵対し、二度とH・J闘争をしないことを約束しようとする訳であるから、我々としても放置しておくことはできないのである。

しかし、上原は、こういふ敗北・投降主義をはずかしげもなく堂々と主張するだけでは満足することができず、自分の超階級的装いをこらしたブルジョア的な「誠実さ」を一層引き立たせる為に、この転向路線を次の様に一般化する。

「小ブル急進民主主義のテロリズムを美化し、合理化して居直るならば、プロレタリア革命・社会主義革命を攻撃しようとする日帝のブルジョア反革命の思うツボにはまり、敗北することになる。逆に、小ブル急進民主主義のテロリズムをきちんと自己批判し、きつぱりと清算してマルクス・レーニン主義・毛沢東思想のプロレタリア革命路線を獲得し、プロ人民の闘いに依拠して検察官と日帝のブルジョア反革命に決していくならば、必ず勝利することができる」。

こういふ主張にぶつかると、その無内容さ故に、事情を知らない読者諸君の中には、なんとなくその気にさせられる者

もあるであろうが、この主張をちょっと詳しく検討してみれば、一体上原は、赤軍派の中で何をやつてきたのか、と思わざるを得なくなるであろう。実際、この上原の無責任な主張は、結局、赤軍派の闘いの政治的、階級的意義を検察官の攻撃から断固として防衛し、継承・発展させていくことは、「ブルジョア反革命の思うツボにはまり敗北する」、だから赤軍派の闘いを「きつぱり清算」しない限り勝利することはできない、という何ともタワケタとんでもない代物なのである。一体どうしてこういう方針が出て来たのであろうか？それは、上原が赤軍派の闘いを具体的な状況と結び付けて歴史的に総括しようとせず、歴史的に制約された赤軍派の欠点や限界を唯一のものであるかのように絶対化し、度外れに誇張させ、「小ブル急進民主主義のテロリズムだった」、「代民族利用主義だった」、「ああすべきだった、こうすべきだった」、というありふれた空文句で赤軍派を清算しているからである。

つまり、上原の総括は、全面否定という一見勇気に満ちた革命的なものに見える絶対的否定であり、それは、結局、無からの創造とかゼロからの出発という虚無的な否定であり、肯定的、革命的なものを継承しようとする形而上学的否定であり、本来的には、赤軍の局部的な失敗や欠陥、弱点を赤軍派の闘争の歴史的、全面的な分析の中で正確に把握するのではなくて、「すつかりダメだった」という挫折と絶望を主

上原は、まず、赤軍派が登場してきたばかりの七〇年前後の階級情勢を、「日帝の体制的危機が始まり、革命情勢が端的に始まり、労働運動の革命的昂揚が始まつた」と規定しているが、こういう規定は、結局、何も語っていないに等しい。どうして「日帝の体制的危機」が始まつたのか？「革命情勢」とはどの様なものか？「労働運動の革命的昂揚」とは如何なる性質のものか？こういうことについては、上原はひとつ具体的に語ろうとしない。これでは、前衛の任務を明らかにすることができないではないか？むしろ、我々が注目しなければならないことは、七〇年前後は階級情勢の根本的な転換期であった、ということであり、「日帝の体制的危機の始まり」、「革命情勢の端的な始まり」、「労働運動の革命的昂揚の始まり」ということだけを強調するだけでは、一面的で、無内容で、誤っている。

すなわち、安保大会戦のこの時期の特徴は、何よりも、ペトナム革命戦争を最前衛とする第三世界人民の民族解放闘争の前進による新旧植民地主義体制の動搖が現代帝国主義の戦後相対的安定期を金般的な停滞的危機に転化させ、世界革命戦争を防衛段階から持久的対峙段階に発展させたことであり、六八年テト攻勢を頂点とするペトナム革命戦争や中国プロレタリア文革の勝利的前進に呼応した反帝闘争・反戦闘争・大學闘争などの大衆的実力闘争の昂揚が、なし崩レフアシズム体制を純化させ、ブルジョア国家権力との階級攻防の急進民

張する敗北主義である。言い換えれば、彼こそ、情勢の変化の中で「左」右の日和見主義の間を不斷に動搖し、困難な情勢に直面すると、たちまち悲観主義に陥る小ブル急進主義なのである。

どの様な事物も、否定面と肯定面の対立物の統一である。そして、肯定面は否定面との闘争を通してのみ古い事物を新しい事物に転化させ、ひき続き発展していくことができる。だから、我々は、運動の発展を深く分析して総括し、成果を踏まえて欠陥を克服し、闘争を継承・発展させていかなければならない。従つて、我々は、上原の「闘争の革命的で先進的な役割を防衛することはあくまで第二義的であつて、誤った側面を自己批判し、清算することを第一義的に重視しなければならない」という逆立した「弁証法」に断固として反対し、「闘争の革命的で先進的な役割の防衛」を第一義的に重視し、その中で「誤った側面」や欠陥を克服し、新生の事物を大事に育てていかなければならぬ。上原の「弁証法」は、新生の事物を否定する転向の為の詭弁以外なものでもない。そこで我々は、何よりも悪質な屈服路線を支える上原の赤軍派全面清算の為の総括を粉碎し、赤軍派の革命的側面を大事に守つていかなければならない。しかし、上原の総括は、これ迄の清算主義とは比較にならない程反動的であり、まさに階級闘争からの逃亡の為の本格的な清算主義であり、典型的な敗北主義である。

だから、この様な時期に問われた前衛の任務は、何よりも先づ、この階級情勢の転換に答えるべく、前衛自身の変革をかちとることであつたろう。ところが上原は、「プロレタリアートの大衆に対して日帝の反革命を暴露し、社会主义革命、プロレタリア人民の権力の樹立を呼びかけ、プロレタリアを革命党建設の闘いに結集させつつ、同時に、プロレタリア独裁の人々の権力樹立をめざす武闘を開始する必要があつた」とか、

「大衆に対する粘り強い政治的暴露と政治的宣伝・煽動・組織化の遂行（全国政治新聞の計画）」といふうに実際に定見に、且つ一般的に設定し、口から出ませて自己の日和見主義を隠ベイしているが、これもまたインチキでデータラメであり、誤つてゐる。まず第一に、「日帝の反革命の暴露」、「プロレタリア人民の権力の樹立の呼びかけ」、「革命党建設」、「武闘の開始」、「全国政治新聞の計画」を我々が放棄してはいた、等というのは誤りであり、我々はこれらを必死で追求していた。もしこれらを放棄してはいたといふならば、それは上原が放棄していたのであつて、我々ではない。しかし、第二に、これらのことと、国際—国内共産主義運動の総括や現代帝国主義—日本資本主義の資本蓄積構造、革命の性

格と階級・階層政策、社会主義革命戦争の政治・軍事法則、党建設の核心、組織・陣型、戦術等を解明しきれておらず、従つて、前衛主体の共産主義的姿勢がからとられていない段階で一般的に語つてもしかたなく、まず、これらの未解明の諸問題を解明する闘いに集中しなければならなかつた。更に第三に、上原の設定した前衛の任務は、「党建設と武闘」を語るのみで、建軍ソビエト運動のプロ独根拠地建設を無視している点で完全な招喚主義のテロリズムである。こうして、上原自身こそ「小ブル急進主義のテロリズム」であることが明らかになるのである。

こういうすぐバレてしまつた主張を恥かしげもなく行なつてゐるのは、上原が、同盟の闘いそのものを深く分析して、同盟の発展のために問われている課題を発見しようとしているからであり、そして何よりも上原自身が幹部として、同盟の闘いを主体的に担つてこなかつたからである。だからいまどろくなつて、同盟赤軍派の誕生を「赤軍派は小ブルインテリである学生を中心にして、プロレタリアートの解放を代行して闘おうとし、主觀的決意と空論的路線によつて日帝に対する社会主義革命を実現しようとして、実際には小ブルインテリである学生の資本主義に対する急進民主々義的な憤激を代表しているにすぎなかつた」等ときめつけて平氣で全面清算するのである。当時の階級情勢の転換に応じて、大衆実力闘争では粉碎しきれなくなつたなし崩しフシアシズム—機動隊政治

發展させる闘いに出撃したのである。だから上原が赤軍派の登場に対し張りつけてくれた「代行主義」とか、「主觀的決意と空論的路線」とか「小ブルインテリの急進民主々義的な憤激」とかのレッテルは全く当らない。又、たとえそういう欠点があつたとしても、新生の事物だつた小ブル革命主義の赤軍派は萌芽的マルクス主義として、革命社、生進性を有し、むしろそつた欠点との闘いを通して發展していく可能性をもつていたのである。もし上原が望むよう正しい路線を実践もせずに絶対的・一挙的にかちとることができらならば、どうして赤ん坊は共産主義者ではないのかね。全知全能の神であらせられる上原教祖におうかがいしたいものである。こういうわけであるから上原にとつては、もはや六九年前段階蜂起、H・J闘争とそれ自身のもつ萌芽的マルクス主義としての先進性・革命性などまつたく見えず、新生の事物であるが故にもつてゐる多くの欠点や欠如しか目につかず、あたかもこの欠点を絶対化してこれらの闘いを絶対化してこれらの闘いを全面清算することが革命的なものであるかのように思えてくるのである。しかし理論の基礎が実践であり、社会的実践の中からのみ人間の正しい思想が生まれてくることを認める我々にとつては、上原の主張はまつたくお話にならないくらい上原の無知・無能をさらけだしたものである。

上原はまず、六九年前蜂を「小ブルインテリである学生を中心として社会主義革命、プロレタリアートの解放をめざす

の突破に向けて建軍武闘＝革命戦争を大胆に提起し、安保大会戦へと出撃し、プロレタリア革命戦争のための綱領・組織・戦術の獲得＝プロレタリアート党の建設の環を見つけだすことであった。我々がプロレタリア革命戦争を知り、そのための路線を確立するためには書物の中からだけではだめである。だから、プロレタリア革命戦争について何も知らず、従つて労働者大衆をプロレタリア革命戦争に組織する路線を獲得しきれていない段階で、プロレタリア革命戦争に労働者大衆を組織する闘いをしなかつたといつて我々を非難し、罵倒することは、あれこれとわきから評論するだけで苦勞しようとしたい者の、「ないものねだり」以外のなにものでもないのである。当時、プロレタリア革命路線を獲得しきれていなかつたのはまつたく歴史的な限界を突破する闘いに前進するのか、それともその限界を固定化し、合法主義・一国主義・経済主義の小ブル稳健主義に後退するのか、ということであり、このことがブンドの分裂、赤軍派の登場を必然化させたのである。そして赤軍派は、一向過渡期世界論を清算せんとする小ブル思想主義の日向派や、小ブル日和見主義の仏派との断固たる闘いを通してこれらの小ブル稳健主義と別し、一向過渡期世界論を防衛し、さらにプロレタリア革命路線の獲得でもつて

「武装闘争」を開始し、その衝撃でプロレタリアを決起させる」というもの、として総括し、これまでの清算主義者がさすがに公然と清算し切れなかつた、六九年前段階蜂起を實にあつたりとものの見事に清算してゐる。そしてつづいて、「ところが赤軍派は、六九年前段階蜂起の敗北から何ら正しい教訓を導き出すことができず、いつそう小ブル急進民主々義を徹底していつた。」等といつて大菩薩闘争の敗北後の論争状況を全く無視した主張を行ない、さらに「（六九年前蜂の）敗北から絶望に陥り、日本のプロ人民に対する不信感を醸し、プロレタリア人民からますます遊離してしまい、民族解放闘争と社会主義革命を推進している国外の革命勢力に依存して、アジアの革命勢力を手前勝手に日本の革命闘争に利用することを企図して国外逃亡を行なうとしていた」とか、「我々は日帝による朝鮮への植民地支配と民族的抑圧に対して無自覚に加担し……その結果、朝鮮人民と結合しえず、かつ自らも日帝の支配に屈服してきた。こういう状態にありながら、勇敢と日帝の侵略、抑圧と闘うのではなく、我々自身の任務であり、我々が朝鮮人民に連帯する前提であるところの日帝の打倒の日本革命に朝鮮人民に依存し、朝鮮人民を利用しようととした」と「国際根拠地建設論」を総括、これまでブルジョア供の反赤軍派キャンペーンを利用したあり当たりの常套語でもつて全面清算するのである。こうして上原は、これら

ならない」と結論を出し、この結論を土台にして、H・J公判闘争の屈服路線、反赤軍派の転向路線を確立し、アラブにおける日本赤軍の闘いをも否定していくのである。はたして我々が「敢然と日帝の侵略・抑圧と闘う」ことを放棄し、「日帝による朝鮮への植民地支配と民族的抑圧に対しても自覺に加担し」「日帝の支配に屈服してきた」であろうか？もちろん我々は、我々の闘いが不十分で未熟であつたことは認める。それは上原に指摘されるまでもない。しかし我々は、我々が何よりも第一に堅持した「米・日帝国主義の侵略・抑圧・反革命を革命戦争で打ち破れ！」のスローガンのもとに、日帝内における革命戦争の道を断固として追求し、六九年から七二年に至る苦闘を行なつてきたのである。ところが上原は、との「マルクス・レーニン主義・毛沢東思想のプロレタリア革命路線」を獲得するための闘いを無視して、その闘いの不十分性をあれこれとあげつらい、まるで我々がわざと誤りを犯すことを追求してきたかのように批難しているのである。ここまで公然と我々に敵対してきた上原の「勇気」には全く恐れいるが、これだけのことを断言するかぎり、それ相応の「階級的責任」を問われることを覚悟してもらわねばならぬ。

上原は六九年前峰を「武装闘争の衝撃でプロレタリアを決起させるもの」等といつて歪曲して清算しているが、これは正しいであろうか？全く正しくない。六九年前峰の核心は、タリア革命主義の思想性・政治性・階級性によつて革命主体が武装しきれていたからである。このような致命的限界故に、六九年前峰は敗北せざるをえなかつたのである。とは言えこれらは、全く歴史的に規定された限界であり、従つてこの限界と敗北は、六九年前峰の革命的意義を決して低るものではない。六九年前峰は、建軍武闘の提起によって安保大会戦—プロレタリア革命戦争への道をきり拓き、小ブル穏健主義と袂別した赤軍派を小ブル革命主義からプロレタリア革命主義へと飛躍させるための出発点となつたのである。だが、六九年前峰の敗北は、「すでに思想・綱領問題・党建設・陣型・戦術問題における小ブル革命主義のプロレタリア革命主義への止場の問題を提出し始めていた。それは主要には、前峰路線の政治的軍事的曖昧性に対し、前段階決戦の社会主义革命戦争は如何なる政治・軍事法則をとつて展開するのか、という問題として大衆的に提出され始めていた。これは本来ならば、思想・政治路線の獲得と党建設とを結びつけ、又、依拠すべき階級の問題を明確に解決し、それを主体とした七〇年代革命勢力に立脚するプロ独運動と前衛の正規的権力闘争との結合という反帝反米の攻撃的蜂起の陣型・戦術として指定されていくのであるが、しかしこの段階においては、党主体の思想性・政治性を根底的に問ひ、党派の欠陥や弱点、誤りを純化させるまでに深化されておらず、しかも、七〇年代革命勢力の階級闘争の舞台への登場も、萌芽で

六九年秋期闘争の昂揚に前衛の正規的権力闘争を結合させ、ベトナム民族解放戦争と結合する革命戦争に着手し、現代帝國主義の侵略抑圧反革命同盟の再編強化となし崩しアシズム体制の確立を粉碎し、現代帝国主義の相対的安定期から停滞的危機Ⅱ恒常的内乱のプロレタリア社会主義革命の時代への打倒殲滅の志向をもつ建軍武闘を最初に、大胆に提起し、小ブル急進運動から袂別した七〇年代のプロレタリア革命戦争への出撃をかちとつた革命的意義を有し、断固として支持されるべきものであり、上原のたわけたきまり文句によつて清算できるようなものではない。

しかし六九年前峰は、階級的立脚基盤を依然として小ブル急進層におかざるをえなかつたこと、従つて、党の正規的権力闘争を小ブル急進運動の昂揚に合致させようとしたこと、といふ致命的限界をもつていた。というのは、階級闘争がプロレタリア革命戦争に表面化し、階級闘争の舞台から後退し始めたため、小ブル急進運動の昂揚に前衛の攻撃を結合させようとするとする党的蜂起は孤立した突撃とならざるをえなかつたからであり、しかも小ブル急進層に依拠している反省がないが故に、米日帝国主義を徹底して殲滅しなくプロレタリア革命主義へと飛躍させるための出発点となつたのである。だが、六九年前峰の敗北は、「すでに思想・綱領問題・党建設・陣型・戦術問題における小ブル革命主義のプロレタリア革命主義への止場の問題を提出し始めていた。それは主要には、前峰路線の政治的軍事的曖昧性に対し、前段階決戦の社会主义革命戦争は如何なる政治・軍事法則をとつて展開するのか、という問題として大衆的に提出され始めていた。これは本来ならば、思想・政治路線の獲得と党建設とを結びつけ、又、依拠すべき階級の問題を明確に解決し、それを主体とした七〇年代革命勢力に立脚するプロ独運動と前衛の正規的権力闘争との結合という反帝反米の攻撃的蜂起の陣型・戦術として指定されていくのであるが、しかしこの段階においては、党主体の思想性・政治性を根底的に問ひ、党派の欠陥や弱点、誤りを純化させるまでに深化されておらず、しかも、七〇年代革命勢力の階級闘争の舞台への登場も、萌芽で

これに對して我々赤軍派は、思想・政治路線＝党建設の問題に真正面から答えることができなかつたものの、六九年前峰を清算し、建軍武闘の着手の課題から逃亡し、革命戦争と無関係にして着手するのかとどうことをめぐつて、革命主体の問題を不間にした陣型・戦術問題におかざるをえなかつた。そしてこのようなものとして、ゲリラ戦争路線に徹するのか、待期主義的・受動的蜂起主義に後退するのか、という議論が爆發していく必然性があつた」（「第一次綱領草案」塩見論叢N-09）

しかなかつた。そのため、論争の基軸は思想・綱領問題におかれず、六九年前峰によつて提起された建軍武闘をどのようにして着手するのかとどうことをめぐつて、革命主体の問題を不間にした陣型・戦術問題におかざるをえなかつた。そしてこのようなものとして、ゲリラ戦争路線に徹するのか、待期主義的・受動的蜂起主義に後退するのか、という議論が爆發していく必然性があつた」（「第一次綱領草案」塩見論叢N-09）

これに對して我々赤軍派は、思想・政治路線＝党建設の問題に真正面から答えることができなかつたものの、六九年前峰を清算し、建軍武闘の着手の課題から逃亡し、革命戦争と無関係にして反対し、なによりも建軍武闘の着手の課題に答えていこうとした。だから我々が、六九年前峰の敗北を全面的に克服しなかつたにせよ、六九年前峰を清算せず、小ブル革命主義を徹底化させようとしたことは何ら非難されるべきことではなく、当時の段階においてはまつたく正しいことであつた。そして我々は、「六九年前峰の敗北を組織・戦術問題の総括でもつて切りぬけ、地下の『蜂起の軍隊』建設と軍事技術の習得に向けて国際根拠地を建設し、労働者國家を世界党建設に結合させ、そのもとで『蜂起の軍隊』を建設し、七〇年前峰を貫徹し、民族解放戦争と結合した日本革命戦争を開始すること」（坂東同志『連赤問題の形成の弁証法』）と

いう方針を決定した。そして、この「国際的階級闘争との結合、世界党建設・国際根拠地の獲得」（「綱領草案」）の方針のもとに、我々は「よど号H・J闘争」を貫徹したのである。だから、このH・J闘争はたしかに「日本国内のブルタリアートに依拠して、思想・政治路線＝党建設を前進させて、陣型・戦術問題を現実の階級闘争の中で解決していく」という、日本共産主義者の自力更生・刻苦奮闘の基本姿勢から、そこに建軍武闘の着手の課題に答えるものではなかつたが、

それでいる点では迂回主義の国際拡散主義といふ欠陥をもち（『綱領草案』）、眞のプロレタリア国際主義でなく、また眞に建軍武闘の着手の課題に答えるものではなかつたが、しかし、それは上原のいうような「絶望」「日本のプロレタリア人民に対する不信感」「日帝を打倒する闘いを放棄した逃亡主義」「他民族利用主義」とは全く無縁である。実際、我々はこの闘争によつて、米日「韓」共同反革命を内側から突破し、共同反革命の実態を暴露し、米日帝国主義に打撃を与え、建軍武闘の革命的意義をますます鮮明にさせただけでなく、なによりも国際共産主義運動の地方的存在として把え、それに対する態度をあいまいにしていた中国・朝鮮・ベトナムのアジア共産主義を正しく評価し、反スターロツキズムと毛教条主義を立場していく契機を得てし、眞のプロレタリア国際主義に立脚した毛沢東思想を継承したマルクス・レーニン主義のブルタリア前衛党建設へと前進する道を切り拓いたのである。従つて「よど号H・J闘争」は、たとえ欠如が

を得ようとする方針を確立したあと、上原はさらに、それに「人質」への謝罪をつけ加え、ブルジョア供の「人質」キャンペーン＝ブルジョア的人道主義への屈服でもつて仕上げを行なつてゐる。上原は自分が乗客に自己批判し、謝罪しているのにブルジョア供はしていない、などときれいごとを言つてゐるが、ブルジョア供が「人質」に謝罪するわけがない。なぜなら「人質」問題などといふのは、ちようどべトナムにおける難民問題と同様にブルジョア供が反革命を正当化するために利用した問題にすぎないからである。ブルジョア供は常に自己の残虐な反革命を美辞麗句でもつて公認化させ、革命を極悪非道な犯罪として処理しようとするのだ。そしてお人善しの上原は「いい子ちゃん」になろうとして超階級的人道主義をもち出し、このブルジョア供の人道主義に追随し、革命の犯罪化・H・J闘争の抹殺に手をかしているのである。我々にとつて本質的な問題は、我々が「よど号」を奪取し、我々の暴力的支配下におくことによつて反革命分子を抑圧すると同時に、乗客をブルジョア独裁下から解放し、中立化しないことはできないであろう。だから我々にとつての「人質」問題とは、H・J闘争の革命的意義を徹底して宣伝・煽動し、ブルジョア供から権力を奪取し、ブルタリア独裁を正しく運用することとはできないであろう。

だから我々にとつての「人質」問題とは、H・J闘争の革命的意義を徹底して宣伝・煽動し、

あつたとしても断固として支持されなければならない。ところが上原は、こういうH・J闘争の革命的側面と歴史的に制約された欠点、そしてH・J闘争によつて鮮明化されたアジア共産主義に対する我々の態度、等に対しても少しも分析しようとせず、ブルジョア供が使い古したレッテルを再びもち出してきて我々に張りつけ、正義面をし、自ら武装解除してブルジョア供に媚を呈し、ごていねいに週刊紙の記事まで添えて全面清算の正当化を行なつてゐる。しかも、彼の腐敗・堕落ぶりはそれだけにとどまらず「反対論の存在と論争の全面化」というアリバイをもち出してH・J闘争から敵前逃亡を合理化しようとしている。上原は口先では「田宮独走説」に反対するふりをしつつ「反対論の存在」ということでもつて自己の逃亡をこまかうとしているが「意見の対立があつた」という主張は「H・J闘争の方針が決定されてなかつたにもかかわらず田宮同志が独走した」という「田宮独走説」と何らかわりなく、むしろ「H・J闘争に反対であつた」という主張をもち出してきてH・J闘争に敵対せんとする点で「田宮独走説」よりももつと悪質である。「共謀共同正犯論」は、H・J闘争への報復攻撃としてデツチあげられた虚構を解体すること、このことによつてのみ可能であり、H・J闘争に敵対するアリバイ証明は、敵前逃亡である。

こうして、H・J闘争の革命的意義を否定し、それに敵対し、その成果をブルジョア共に売りわたすことでもつて無罪

命を暴露し、乗客の怒りをブルジョア供に向けさせることである。

以上のように、上原のH・J闘争の全面清算とそれへの敵対はまったくブルジョア反革命への屈服に一切の根拠をもつてゐるのである。こうして上原はH・J闘争に公然として敵対し、新清算主義の転向派として正体を公然化させてやれるのである。H・J公判闘争における基本方針はH・J闘争の清算の中からは絶対に生まれてこない。それはあくまでもH・J闘争を断固としてまず支持し、ブルジョア反革命のH・J闘争を粉碎せんとした凶悪な陰謀術策を徹底して暴露し、H・J闘争に対する犯罪攻撃を粉碎し、革命的意義を防衛していくことの中からしか生まれてこない。だから我々は上原の、H・J闘争を敵に売りわたし、赤軍派から脱走していく屈路線を断固として糾弾し、H・J公判闘争への敵対を粉碎し、上原の敵前逃亡に革命的鉄槌を下さねばならない。なぜなら斗うふりを装いつつ試みに転向を正当化するような路線は單なる転向よりも悪質でありそういうものを放置しておくことはブルタリア人民に腐敗と墮落をもちこませ、革命派の再進撃を防害する日和見主義を勇気づけるからである。

共産主義者同盟赤軍派（プロ革）

一九七五年九月五日発行

定価四〇〇円